

# 目 次

<b>巻頭言</b>			
はじめに	二神 俊一		1
<b>特集</b>			
創立10周年記念事業「ふたがみまつり」	事 務 局		3
概 要			
由利島紀行			4
歴史講演会			6
講演・二神文書目録と解説	田上 繁		7
講演・瀬戸内「海賊衆」の性格について	石野 弥栄		12
釣り大会			23
<b>シリーズ</b>			
系譜・家紋紹介【梶原二神氏】	事 務 局		25
<b>トピックス</b>			
豊田氏慰霊五年祭			
概要			46
浩三さんとの最後の山口小旅行	二神 俊一		49
忽那諸島の歴史シンポジウム	事 務 局		53
講演・近世の二神家文書と二神家	関口 博巨		55
<b>会員さんからの投稿</b>			
浩三会長のご冥福を心からお祈り申し上げます	二神 守		66
浩三先生と私たち	二神照夫・和子		68
坂の上の雲	二神 敏郎		70
「縁」に思う	二神千恵子		72
私の二神氏	二神 康司		74
平成22年を振り返って	二神美知子		76
母方の祖、藤原姓溝田氏について	溝田 孝一		79
<b>浩三会長のご家族から</b>			
「ありがとう」美しい言の葉	二神チヨリ		87
父と二神系譜研究会	二神 敬次		88
父を偲んで	井口 真理		90
<b>役員をつぶやき</b>			
大人、浩三会長を偲んで	二神 久蔵		91
今日、思うこと	二神 亮郎		94
頭の痛い墓問題	二神 康郎		96
忽那諸島の旅	二神 元信		98
二神浩三さんの思い出	二神 俊一		101
故 浩三会長を偲ぶ	二神 宏介		107
豊田涉覚書から	豊田 涉		111
<b>ふたがみにまつわる話</b>	事 務 局		113
<b>会 則</b>			114
<b>役員名簿</b>			116
<b>入会申込書</b>			117
<b>編集後記</b>	二神俊一・豊田 涉		118

# はじめに

副会長 二神 俊一

本年は二神系譜研究会が設立されてから10周年の節目の年にあたります。

もともと、二神姓を名乗る者およびその関係者や歴史に興味がある方々の集まりから、本会がスタートいたしました。この10年間は、神奈川大学特任教授・日本常民文化研究所員、故網野善彦先生はじめ、多くの関係者のご指導・ご支援を得ながら、謂わば、手探りの状態で活動を進めてまいりました。

これまでの調査・研究で、「二神文書」「二神系図」などが、少しずつ明らかになってきておりますが、まだまだ調査が進んでいないものもあります。さらに、今後、新たな二神文書や系図の発見も期待したいものです。



二神島から由利島探索 平成22年6月5日(土)  
左から、二神英臣、二神英幸、二神博典、二神俊一、豊田涉

一方では、本会を運営しているスタッフも確実に歳をとり、終身会長を引き受けて頂いていた二神浩三会長が6月に急逝されるなど、本会にとりましても激変の節目となってしまいました。

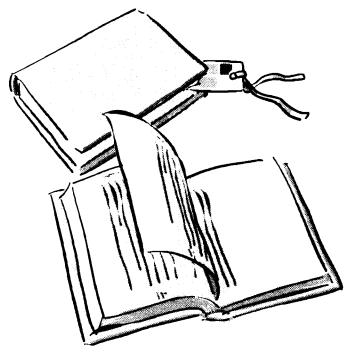
さらに、少子化や個人情報保護法の問題など、情報の入手が困難になるなど大きな壁に直面していることも事実でございます。

幸い、スタッフは、前職が大学教授、J R、金融機関、公務員、IT企業、製薬会社など多種多彩な顔ぶれが揃っていて、いろいろ新しいアイデアもありで、これからの諸活動に力を発揮してくれることを期待しております。

また、これまでの活動の集大成として、二神系譜研究会のホームページをリニューアルして充実してまいりました。他方、同じような活動を進めている系譜の組織も台頭しており、相互に連携をとりながら活動を進めていくことも大切だと思います。

いずれにいたしましても、二神系譜の調査・研究はエンドレスの活動になろうかと思いますが、今後、さらに、関係者の皆様のご協力・ご指導をお願い申し上げます。

(平成22年12月10日)



## 特集

# 創立10周年記念 「ふたがみまつり」二神島で開催

## 由利島紀行・歴史講演会・釣り大会で賑やかに

平成22年9月5日（日）、二神系譜研究会創立10周年を記念し、二神島で「ふたがみまつり」が開催されました。全国各地からの会員さん、神奈川大学日本常民文化研究所の調査団ご一行、二神島住民の方々延べ50数名が参加しました。

今年は4月～10月まで「松山しま博覧会」が松山市の島嶼部等を舞台にして行われました。「ふたがみまつり」は、その協力事業の一つでもありました。

「ふたがみまつり」は、由利島歴史紀行、歴史講演会、釣り大会の三部立てで実施しました。その様子を紹介いたします。

### 9月5日（日） 「ふたがみまつり」日程

- 7：40 高浜港発
- 8：56 二神港着
- 9：00 由利島紀行第1団二神港出港
- 9：20 釣り大会開始
- 11：00 歴史講演会
  - 「二神家文書目録と二神氏関係系譜史料の紹介」  
田上 繁（神奈川大学日本常民文化研究所：所員）
  - 「瀬戸内『海賊衆』の性格について」  
石野 弥栄（愛媛大学講師）
- 昼食
- 13：40 由利島紀行第2団二神港出港
- 14：20 釣り大会終了、審査、表彰
- 16：42 二神港発
- 17：23 高浜港着

## 由利島紀行

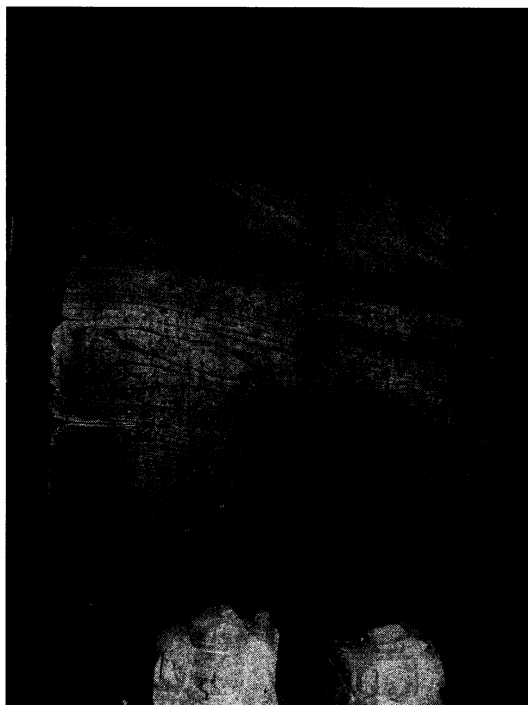


「ふたがみまつり」のスタートは、由利島歴史紀行から開始されました。

午前9時、広島から駆けつけた二神博典船長（道後二神氏）の操縦する定員12人のプレジャーボートに遠路から参加いただいた希望者の第1団が二神港を出発。二神島の二神英幸さんが副

船長としてサポート役で乗船しました。参加者の近藤義忠さん（77）は、以前由利島に住まわれていたとかで、その頃を楽しんでいました。

由利島歴史紀行の第2団は、「歴史講演会」が終了したあとの午後1時40分に二神港を出発。これには、講演をされた石野弥栄先生、神奈川大学日本常民文化研究所佐野賢治所長も乗船しました。由利島に上陸して、まず安永4年（1775）に二神種章が再建・奉納した「矢立大明神社」を訪ねました。舎内にある祠の中に墨書きされた「一建立願主二神嶋之住荘官二神新四郎藤原種章 同二神藤治藤原



由利矢立明神の墨書きされた文字

種福」の文字を再確認しました。これは、種章が元文6年（1741）由利島を10ヶ年伊予郡の肥草山にすると松山藩から沙汰があったことや、明和5年（1768）松山藩による由利島召し上げ事件発生などを受けて、由利島の所属をはっきりとさせるため「荘官」と位置付けて記述をしたのだと思われます。わずかに1時間ほどの滞在時間でしたが、先人たちのいろんな思いをいだいて由利島を後にしました。



「ふたがみまつり」参加者

## 歴史講演会

歴史講演会は、午前11時から二神集会所で開催しました。島の人も含め50人近くの参加者があり、豊田渉常任理事の進行で始まりました。

あいさつで二神俊一副会長は、「本来ならば、この席に立って挨拶をされる予定でありました浩三会長が、去る6月18日に急逝されました。この10周年記念事業の行事をどれほど楽しみにされていたのかと思うと……今もって残念でなりません。会長のご意志に応えるためにも、今後更に会の発展をはからなければなりません」と述べました。

続いて、来賓として出席いただいた、田中政利「松山しまはく」実行委員長は、「この10年間の二神系譜研究会の活動は素晴らしいものがあります。中島の「忽那家文書」は国の重要文化財になりましたが、一族の研究は進んでいない。今後とも、二神系譜研究会がリードしてお手本を示してほしい」と挨拶されました。

講演会は、はじめに神奈川大学日本常民文化研究所の田上繁副所長が「二神文書目録と二神氏関係系譜史料の紹介」、続いて、石野弥栄愛媛大学講師が「瀬戸内『海賊衆』の性格について～その「衆的結合」をめぐって～」の内容で、それぞれが1時間余りずつ講演を行いました。講演のあと、二神英臣事務局長が「二神系譜研究会10年の歩み」の内容で10年をたどりました。

閉会のあいさつは、二神興三郎常任理事が、「二神島で会合が開けるのは幸せであると思います。今後とも何年か毎にこのような会合を持ちましょう」と述べ、講演会を終了しました。

次に、お二人の講演内容のレジュメを掲載します。(紙面の都合上、田上氏の掲載資料は【表1】【表2】【表3】のみとしました。ご了解ください。)

# 「二神家文書目録と二神氏関係系譜史料の紹介」

神奈川大学日本常民文化研究所 副所長 田上 繁

## 1. 二神司朗家文書の整理・分類作業の進捗状況

### ① 第1次採訪文書

総点数996点を数える第1次採訪文書については、目録取り作業をすべて完了し、入力作業も終え、現在、最終的な点検を行っている段階である。



### ② 第2次採訪文書

総点数約5000点にも及ぶ第2次採訪文書については、目録取り作業をほとんど終え、最終段階の入力作業も補修中の文書（約100点）を入力すれば完了する。傷みの甚だしい文書については、裏打ちによる補修作業を進めているが、この作業もあと5、6点を残すのみとなった。

### ③ 『二神司朗家文書目録』の刊行

第1次採訪文書と第2次採訪文書を合わせて1冊の目録にまとめ、補修・入力・点検などの作業が終わり次第、目録の編集作業を進めて公刊する。なお、これらの作業と併行して、将来の史料公開に向けて、デジタルカメラでの撮影も順次行っている。

## 2. 二神島近在における二神氏関係系譜

### ① 二神氏縁家の系譜【表1】【史料1】【表2】【表3】

安永10年正月の「二神氏末家之次第」（第1次76）、安永5年の二神氏の系図関係史料（新出1-0、1-1、1-2、1-3）を中心に二神氏縁家の系譜をたどる。また、婚姻や養子の縁組の実態から二神氏の人的な広がりを見ていく。

### ② 饒村豊田家の系譜【史料2】

二神種章によって作成された「豊田二神藤原氏子孫系図略図



写」(第1次77)、および上記の「二神氏末家之次第」などを付き合わせながら、饒村豊田家の系譜の内容をうかがう。

③ 怒和島柳原家の系譜【史料3】【史料4】

安永10年正月の「柳原氏系譜」(第1次75)の一部と、「(柳原家由緒書写)」(第1次313)を紹介して、怒和島柳原家の系譜を明らかにする。

### 3. 豊後国久留島藩の系譜と家臣の二神氏関係系譜

① 二神氏の由緒【史料5】

二神氏の由緒に関する史料(第1次311号文書)を紹介しながら、河野氏、豊田氏(のち二神氏)、来島(のち久留島)氏などの関係を追究する。

② 豊後国森の久留島氏の系譜【史料6】【史料7】

来島(久留島)氏の系図は下書き的なものしか伝存しないが、安永8年8月10日に家臣の秋山多仲が二神島に来島したときに作成したと思われる「豊州森久留島信州之家穂山多仲由緒書付」(第1次72-0、72-1)や、年不詳の「村上氏系図」(第1次312)などにより、久留島氏の系譜の一端をうかがうことにする。

③ 久留島藩家臣 得能新三郎・秋山多仲・二神瀬兵衛の系譜に関する書状【史料8】【史料9】【史料10】【史料11】【史料12】

久留島藩家臣の書状の内容から、得能新三郎・二神国次父子の由緒(第1次69)や、二神姓に関する由来について検討する(第1次72-2、79-0、79-1、採訪時不明26、第1次90)

表1 二神家系図・由緒書関係文書一覧(第1次・第2次)

No	標題	作成・書写年代	作成・書写者	受取	備考	目録No (Noのみは第1次)
1	二神藤原氏子孫系図之大段次第	享保 17. 8 (1732)				38
2	(錦)「系図并古来書附写」	安永 5. 2 (1776)	二神新四郎藤原種章			新出 1-0
3	藤原氏嫡流并尊田二神氏之子孫系図写	安永 5. 3	二神新四郎藤原種章		「系図写」	新出 1-1
4	藤原氏尊田二神之嫡流系図 巻	安永 5. 3	二神新四郎種章		「系図接巻」	新出 1-2
5	藤原氏尊田二神先祖半中興之靈会年日忌録	安永 5. 4	二神新四郎種章		過去帳下巻	新出 1-3
6	(過去帳)	安永 5. 仲春日	当主二神藤原種章		後年、加筆あり	—
7	油利嶋(寛文2~安永7)	(安永 7)	新四郎			5
8	百合島嶼	(安永 7)	二神新四郎種章			71
9	寛(豊後)久留島信濃守職家中得能新三郎等二神家末葉の旨申出につき書上)					69
10	(包紙)「豊州藤久留島西州之家庭祖山多仲由緒書付」	(安永 8. 8. 10)		(二神種章)		72-0
11	(豊後)藤久留島信濃守家系図	(安永 8. 8. 10)		(二神種章)	写	72-1
12	(久留島)家中秋山家由緒問合せ願いの書状	(安永 8. 8. 10)	秋山多仲光永	二神新四郎		72-2
13	(包紙)	(安永 8. 8. 11)	龜山多中	二神新四郎		様不 24-0
14	(包紙)野家系流増し申し置きの件につき書状)	(安永 8. 8. 11)				様不 24-1
15	(包紙)	( ) 正. 5	久留島信濃守内秋山多仲			79-0
16	(巨那)系図荒増し物廻りの件書状)	( ) 正. 5	秋山多仲光永(花押)	二神新四郎		79-1
17	平陽河野盛彦記ノ内(抜巻)	安永 9. 初夏写				74
18	芥ノ陽河野家譜人數之巻				種章の筆跡	新出 5
19	(村上氏系図)				種章の筆跡	312
20	二神氏家系之次第	安永 10. 正	二神藤右衛門種章			76
21	初原家系譜(下巻)	安永 10. 正	二神藤右衛門種章	(柳原喜七郎方)	「尋古記改之」	75
22	(包紙)「白石嶋 佐五右衛門」				種章の筆跡	313-0
23	(柳原)由来書 写)				種章の筆跡	313-1
24	(二神氏系図)	(安永 7 以降)				78
25	(豊田)二神藤原氏子孫系図略写)		二神藤右衛門種章			
26	(二神)家由緒につき書付)		二神藤右衛門種章			
27	寛(二神)柱由来お願いのため推参につき)	文政 5 (1822). 3	豊後秋葉郡藤久留嶋伊予守家 来 二神貞兵衛重村(花押)	藤原田家	種章の筆跡	77
28	二神村新四郎由緒 助功ノ親類附控	天保 5 (1834)~			種章の筆跡	311
29	寛(柳)右衛門家由来書付)					90
30	(柳原)氏系図、秋山氏の事等につき書状)	年不詳. 11. 9	民簡	新四郎	後次	103 315 第2次 15-16-1

表2 二神家の婚姻・養子関係一覧（抽出）

当主名	没年	事例	関係	婚姻先・養子先
18代 種家 19代 吉種 20代 種直 21代 家直 22代 家真 23代 種 24代 通範 25代 通種 26代 家種 27代 種長	寛永 5(1628) 明暦 3(1657)			(二神島居住の祖)
28代 種忠	貞享 5(1688)	1	室	防州村上家臣八代島士 村上何某
		2	女子	豊田金右衛門妻
		3	女子	桑原七兵衛妻
		4	女子	杉野市右衛門妻
29代 種次	享和 10(1725)89才	5	室	周防国八代島住士村上四郎右衛門女
		6	女子	饒村 勘左衛門妻
		7	女子	津和地村 桑原民部妻
30代 種永	延享 4(1727)80才	8	後室	防州和田住士 馬場六兵衛娘
		9	女子	杉野与三右衛門室
		10	女子	杉野市右衛門家督 入甥杉野源藏室
		11	弥四郎	柳原権兵衛端女へ養子分家
31代 種信	明和 2(1765)69才	12	室	怒和島 柳原権兵衛娘
		13	女	怒和島 柳原万吉室
32代 種章	寛政 6(1794)61才	14	女子	怒和島 柳原嘉七昌方室
		15	女子	睦月島 村上市郎室
		16	末弥	松山藩中 河東権之丞養子
33代 種福	文政 3(1820)62才	17	女子	周防八代島住士馬場吉左衛門室 (防州和田昌住士 馬場吉左衛門室)
		18	女子	松山 小倉玄道室
		19	女子	風早郡 柳原三宅仙庵室
34代 種五	慶応 2(1866)71才	20	室	二神種福女 (種五は畠里邑浜田喜三右衛門三男)
		21	女子	饒村 豊田金左衛門室

注) 安永10年正月吉日「二神氏末家之次第」(第1次1-76)、安永5年「系図 写下書二神姓」(新出文書1-1)、「過去帳」(無番号)などを照合の上作成。

表3 二神氏縁家の養子・婚姻関係一覧（抽出）

No.	家名	事例	名前	関係
①	勘右衛門家	1	金右衛門	饒村 豊田嘉右衛門家相続 妻 二神八右衛門種忠女
		2	勘左衛門	饒村 豊田嘉右衛門家相続 後二神当家相続 妻 二神源三郎種次
②	弥左衛門家	3	某	二神勘右衛門より分家
③	藤兵衛家	4	種与	二神修理家種二男
		5	平六	於二神島別家
		6	源七	摂州尼ヶ崎土佐屋善七養子
		7	種光	妻 芸州能美之島飛渡瀬村南野清右衛門女
④	久助家	8	種末	二神修理家種三男
		9	種世	妻 松山家中竹村五郎兵衛女
		10	半兵衛	村上家臣八代和田邑垣生赤左衛門養子
		11	女	宇佐三月縁 豊前宇佐社職
		12	種安	妻 村上家臣八代伊保田邑俊成次郎左衛門女
⑤	饒村 豊田金左衛門家	13	種次	二神八右衛門種忠二男 妻 二神藤兵衛女
⑥	八十郎家	14	八十郎	二神八右衛門種忠孫
		15	半平・種行	二神種永五男 妻 防州情島小島某女
		16	宇八	妻 怒和島 柳原金十郎女
		17	女	松山家中某妻
⑦	助之允家	18	種形	二神三郎種次より分家二神源兵衛二男 妻 種次嫡女
⑧	又末家 七右衛門家	19	七郎兵衛	二神勘右衛門二男
⑨	孫三郎家	20	種金	二神三郎種次二男 妻 怒和島 柳原権兵衛昌忠女
		21	久四郎	摂州尼ヶ崎広屋久右衛門養子
		22	喜八	尼ヶ崎ネツミヤ某養子
		23	金右衛門	摂州西ノ宮杉屋某養子
		24	新七	妻 二神藤右衛門種章養女
⑩	又末家 平六家	25	平六	二神藤兵衛末子
⑪	又末家 忠次家	26	忠次	二神半平嫡子
⑫	二神藤十郎家家頼	27	青木忠右衛門	種家予州二神島へ居住の節召連參家頼

注) 安永10年正月吉日「二神氏末家之次第」(第1次1-76)より作成。

# 瀬戸内「海賊衆」の性格について —その「衆的結合」をめぐって—

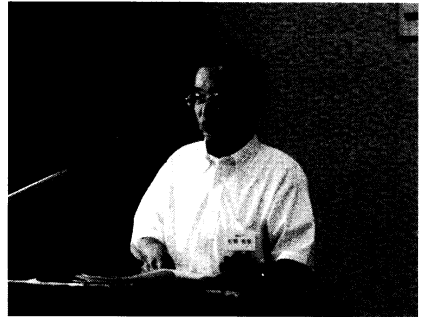
愛媛大学講師 石野 弥栄

(講演の内容)

- 一 講演の趣旨
- 二 いわゆる「海賊衆」の概念規定について
- 三 二神氏等の「衆的結合」の形成と展開

(講師紹介)

1944年、愛媛県愛南町生まれ。国学院大学大学院修士課程修了、同大学院博士課程単位取得。前愛媛県歴史文化博物館学芸課長・湯築城資料館長、現在、愛媛大学・東雲女子大学非常勤講師。専門は日本中世史。とくに伊予・土佐両国をフィールドとした大名権力、在地領主の研究を続ける。近時は、中世伊予の地域領主と宗教との関わりをテーマとする研究にも取り組んでいる。



『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』(共著)、『歴史探訪 伊予仙波一族』(共著)、『江戸時代 人づくり風土記38 愛媛県』(編著)、『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—古文書編』(編集、解説)、『等妙寺跡—埋蔵文化財調査(第2～6次調査)報告書』付論、『伊方の石造物調査報告書Ⅱ』研究編等の著書・編集がある。なお、発表した論文は多数にのぼるが、「海の領主」を直接扱ったものは、「河野氏の守護支配と伊予海賊衆」(愛媛県歴史文化博物館研究紀要1号)、「「齒長寺縁起」の世界」(伊予史談330号)、「戦国期の三崎水軍とその史料」(伊予史談242号)、「室町時代の忽那氏について—河野氏との関係—」(文化愛媛14号)、「河野氏の時代と二神氏」(海の民 ふたがみ3号)等がある。

## 一 講演の趣旨

海上交通・流通経済の大動脈をなす瀬戸内海のほぼ中央部に位置し、島嶼部・沿岸部を多く含む伊予国では、中世の全期間を通じて、「海賊」、「海賊衆」、「警固衆」、「閔立」<sup>せきだち</sup>、「水軍」（古来、船軍・舟軍・舟師・水師などとも表記されている）など様々に呼称される海上勢力が発達し、それが中世の伊予地域史を特徴づけている。これらの海上勢力を古代～中世の全期間を通じて史料上に見える「海賊」という言葉で総括すればよいかもしれないが、古代と中世の海賊とでは、性格が異なっており、しかも、中世の海賊も中世前期と後期では性格が異なっているので、この語で一括するのは、むずかしい。中世の海賊は、単に掠奪などの不法行為をする盗賊ではなく、「海の豪族」、「海の領主」、「海の武士団」と表現されるものに変質したと指摘されている（本文参照）。このような中世の海賊の性格は、「海賊衆」という学術用語で説明される傾向にあるが、研究者によって、その理解は異なり、明確に概念規定されぬまま、恣意的に使用される場合も見られる。とすれば、まず、先行研究で「海賊衆」がどのように概念規定されているのか整理をし、この語が妥当か否か検討したい。次いで、「海賊衆」の特徴ともいべき「衆的結合」を示す事例（二神氏をふくむ）を紹介しながら、その形成の史的意義について言及したい。

## 二 いわゆる「海賊衆」の概念規定について

以下、代表的な海賊史研究者の著書・論文の中で「海賊衆」がどのように理解され、説明されているか、その概念規定を紹介する。

（長沼賢海）

「海上の武力を有する者を、南北朝時代の頃から海賊衆というようになった。（中略）武力、交通、商業と分類しなければ、まとめて海上の勢力ということになる」（『日本の海賊』〈昭和30年発行〉p 3）

☞ここ以外に「海賊衆」という語を使用していない。史料上の言葉なのか、学術用語なのか、一切コメントがない。

（相田二郎）

「抑海賊とは海上の盗賊の意味であったが、中世の海賊衆とは、普

通の海上の盗賊悪党人とは異なり、家柄の卑しくない立派な武士であって、中には地頭もあり、又御家人もあつた。これ等は皆沿岸島嶼にその根拠を有した武士であつて…」(「中世における海上物資の護送と海賊衆」『中世の関所』く昭和18年発行、昭和47年復刻増補版) p 193)

☞事例からすると、早い例として暦応3年(1340)に熊野の泰地・塩崎等の豪族に対して幕府(足利尊氏)が警固を命じた際、この熊野海賊を海賊衆という語で表現しているが、なぜ「海賊衆」という用語(學術用語)を使用するのか説明がない。また、海賊衆を家柄の卑しくない立派な武士といえるのか要検討。

(田中健夫)

「第二は普通海賊衆と呼ばれるものである。これは沿岸・島嶼を根拠地とした武士団をさし、一般には水軍という言葉によって理解される内容のものである。(中略)これらの諸氏が総じて海賊衆と呼ばれたが、(中略)海賊衆はその武力をもって貿易船の護送にあつた。室町幕府は遣明船を派遣する場合、その船舶を海賊の被害から護るためにしばしば海賊衆に対して警固の役を課したが、それにより海賊衆は警固衆とも呼ばれた。」(『中世海外交渉史の研究』第十章中世海賊史研究の動向く1959年第1刷) p 258)

☞明治期以来の海賊史研究の諸業績を網羅的に紹介しており、参考になる。ただ、本書刊行後、この分野の研究が著しく進展した。盗賊的行為をする海賊、武士団としての海賊衆、倭寇として海外で海賊的行為をするものと区別して、研究史を回顧している。警固衆の概念規定がやや不正確。遣明船警固以外に、航路や船舶の安全をはかる警固、莊園の警固、軍事行動などかなり幅広い意味について説明がない。

(河合正治)

「海賊衆は南北朝時代から顕著な動きをみせ、室町・戦国期を通じて活動する。かれらは古代以来の海賊の系譜をひくアウトロー(法外)的な存在ではあつたが、海賊と呼ばず海賊衆というのは、独自の組織をもった海の武士としての性格を強くもつたからである。商人や大名から雇われてその警固の役目を果たす反面もあつたので、また警

固衆とも呼ばれた。(中略) 海賊衆の活動は南北朝時代から活発になったとはいえ、この時期にはまだ沿海の豪族や漁民など海の生活者と深く結びついて行動している。海賊衆が一応独自の体制をもつようになるのは、内海中央部ではかれらの中から能島・来島因島のいわゆる三島村上氏が棟梁として台頭し、互いに連携し組織化を進めた室町時代末から戦国時代にかけてである(「内海中央部の海賊衆—伊予衆の北上と安芸小早川氏勢力の南下—」『瀬戸内水軍』〈昭和51年〉p 20)。同氏「西国の経済発展と海賊衆」『内海地域社会の史的研究』(松岡久人編)〈昭和53年刊〉にもほぼ同一内容の記述がみられる。

☞伊予衆として河合氏は、村上、忽那、浅海(屋代島海賊衆の一つ)、桑原、多賀谷、今岡、高橋、重見、久枝等諸氏、小早川氏勢力として小早川氏庶家の竹原小早川・小泉・浦・生口・小坂・土倉等をあげる。河野氏一族→小早川氏一族→三島村上氏と瀬戸内海中央部の覇権の推移を詳細に記述していて、参考になる。ただし、村上氏などが独自の組織(体制)をもったとされているものの、その実体についての記述は見られない。なお、河合氏は、南北朝後期の河野通堯の九州渡海、帰国の際に、それに随従、協力した海上勢力を海賊衆とみなし、それを記した「今岡陽向軒の手記」について、今岡陽向軒を今岡通任の縁者とし、相当信用がおけるものとする(同氏著『瀬戸内海の歴史』〈昭和42年刊〉p 131)。しかし、彼は河野通堯と同時代の人物で、その手記(覚書)も同時代的史料とみなす根拠は示されておらず、史料批判が必要。

(景浦勉)

「海賊衆とは島嶼部あるいは海辺部を根拠地とし、周辺の制海権を掌握して、武家的活動をする集団を称し、普通に水師とよばれる勢力を指した。(中略)この期の文書のなかには、彼らを警固衆の名称でよんでいる。(中略)したがって、海賊衆・警固衆を海上の盗賊団と峻別して、その史的意義を諒解しなければならない」(『大山積神社関係文書』伊予史料集成第5巻〈昭和52年刊〉p 74~75)

☞具体的な記述の中では、「警固衆村上氏」、「村上海賊衆」と表現し、統一がとれていない。また、「水師」というのが一般名辞で



あるのはどうか。現代的には「水軍」のほうが一般的である。

(宇田川武久)

「本書の筋道についてだが、いちおうここでは海の武士団である海賊衆が、中世の末から近世のはじめの歴史の流れのなかで、いったいなにをきっかけに、守護大名や戦国大名の権力の枠内に組みこまれて、みずからの性格を失っていったのか、つまり海に生きる海賊衆が大名の家来になって陸の武士の論理のなかで生きねばなくなる変質の過程においた。」(『瀬戸内水軍』<1981年第1刷>p 4)

☞本のタイトルには水軍とあるが、章節のたてかたからすると、「守護大名と海賊衆」、「守護大内氏警固衆の解体」、「戦国大名の水軍編成」、「海賊領主野島氏の性格」、「海賊の終末」と用語の使用に統一性がない。序章に全体的な流れ、海賊・水軍・海賊衆・警固衆の用語の説明がない(水軍のみ詳細な記述が見られる)。宇田川氏の論考「海賊衆来島村上氏の性格」(海事史研究16号)では、来島村上、野島村上氏などの海賊衆が土地に相当の主体を置く在地領主的立場にあったとの指摘があるが、海賊衆の本来の性格はあくまでも海上を基盤とする権益にもとづくものとみられ、守護大名、戦国大名との関係から島嶼や沿岸部に所領を給与されたことをもって、その性格づけをするのは妥当ではあるまい。

(網野善彦)

「海賊の場合是一面でお「賊」の意味も失わなかったとはいえ、周知のように「海賊衆」などといわれて海上の警固に携わる人々をさすようになり、やがて水軍そのものを意味する言葉になってくるのである。(中略)「また室町幕府や守護もそれに対抗しつつ、こうした人々をやがて海賊衆として組織する方向に進んでいったが…」(『悪党と海賊』<1995年刊>p 246、p 264)

☞二神氏に関する同氏の論考「「海の領主」をめぐって—忽那氏・二神氏に関連して—」『芸備地方史研究』200号<1996年>にも「このように、二神氏は「海の領主」として海賊衆—海の武装集団の一員になるとともに…」と記す。海賊衆が幕府や守護という公権力から組織される方向だけでよいのか否か検討を要する。

(山内譲)

「海賊と海賊衆との関係については、海賊を古代から鎌倉末にかけての時期に海上で盗賊行為をする勢力、海賊衆を主として南北朝以降に水軍としての活動をした海上勢力として、両者の間に時間的差異を認める考え方、あるいは「衆」という言葉を重視して海賊が衆的結合をとげた海上勢力の集団が海賊衆であるとする考え方などがある。これらはいわば、海賊と海賊衆とが、実体として相違しているとする考え方であるが、私自身は、海賊も海賊衆も実体は同じものだと考えている。(中略) このように私自身は、海賊と海賊衆は実体としては同じものを指す用語で、海賊のある一側面を表現する言葉として海賊衆があると理解している。(中略) なお、海賊・海賊衆とは別に警固衆という用語もある。(中略) この警固衆を海賊衆と同じだと見る見方もあるようだが、私は両者は分けて考えるべきだと思う。海賊衆というのは、……海賊が戦国大名の水軍として取り込まれた場合に、その水軍としての側面を表現する用語として使われるべきものであって、その本質はあくまでも、自由な海の民としての海賊である。それに対して警固衆というのは、戦国大名が軍事的な必要から自ら家臣の一部を割いて養成した水軍というニュアンスが強く、その意味では、戦国大名直属の水軍といえよう。」(『海賊と海城』〈1997年、第1刷〉p12～13)

☞戦国期のみで概念規定するのはやや気になる。先行研究は南北朝期以降の長い期間の中で捉えている。それに、海賊を軍事的側面(水軍としての側面)のみで規定するのは、どうだろうか。武力保持者(武士)としての性格から生じた経済活動の面、海上交通や海運との関わり、地域性など他の要素を加味して概念規定すべきではなかろうか。なお、同氏著『中世瀬戸内海地域史研究』(1998年)では、第二部「海賊衆と戦国大名」という構成で、能島村上、来島村上氏を中心とした活動を具体的に究明している。前掲書では、概念規定をしているが、この書では、その説明がなく、「海賊衆」という語を使用している。最近の同氏の著書においては、極力「海賊衆」という語や概念が排除され、4つのタ

イブの海賊（土着的海賊、政治的海賊、安全保障者としての海賊、水軍としての海賊）に分類している（『瀬戸内の海賊 村上武吉の戦い』 p 6～9 <2005年第1刷>）。

（金谷匡人）

「右の海賊のうち、室町後期から戦国期にかけて特徴的に成立していた「衆的結合をなす海賊」を本書では海賊衆と呼ぶ。この語は……歴史事実の説明上必要な語であると考えられる。また海賊衆の衆的結合は、村上氏のように一族の形態を中核とするものと、周防大島の海賊衆のように地域的にまとまったものがあるが、区別せず海賊衆と呼び……（中略）むしろ瀬戸内海全体を関と考えたときの関守としての役割を果たす、村上氏のような「海賊衆」なのであった。その意味で、小早川氏と村上氏はまったく違う形態を指向していたといつてよい。その証拠に、北上して小早川氏を押し返すその過程で、大規模な戦闘のあった形跡はほとんど認められない。強引に島々を占領し、実質的な占領者として支配を迫認させていった小早川氏を、村上氏は包み込み窒息させるような力で押し返していったといつてよい。両者の力は根本的に違う性質の力であったと考えられる。（中略）村上海賊衆の成立は……「内海島嶼部という場に即して形成された、内海の政治的・経済的秩序の保証者としての衆的結合をなす海賊」という意味で、一応「ネットワークの海賊衆」としておく（『海賊たちの中世』<1998年第1刷>p 3、p 53～54）。

☞金谷氏は「海の民から水軍へー海賊衆」（『内海を躍動する海の民』所収<1995年>）でも「瀬戸内海島嶼部に生きる人々は……それらに適合した社会形態、すなわち「衆的結合」とでもいふべきものを形成していった。ここでは「海賊」と「海賊衆」との概念の差をはっきりさせるために……」と記す。海賊における「衆的結合」の形成の重要性については理解できるが、その「衆的結合」の実態については、具体的な説明がなく、なぜ、そういう形態を必要としたのか、何がその形成を可能にしたのか究明されていない。

(私見)

以下、私見を箇条書きしてみよう。

- ① 「海賊衆」というのは、学術用語であり、その実体が十分検証されたわけではないが、中世前期の「海賊」と呼ばれていた段階から中世後期の最終段階（村上氏による覇権確立をさす）までを説明する言葉としては、有効ではあるまいか。
- ② 「海賊衆」というのは、海の武士団（武士・武装集団）だから特別な意味はないと考えるのは、実態を見失うおそれがある。なぜ村上氏が勢力を拡大化して内海の覇権を掌握できたのか、その理由を解明する必要がある。その鍵になるのが「衆的結合」という形態とみられる。ただ、その語の実体の究明が十分ではないので、史料上に見える「衆」かそれに類する事例を検証し、考察してみたい（次節参照）。
- ③ 最近の海賊史研究をみると、戦国期の最終段階から遡って以前の段階を想定する傾向にあるが、時系列的に発達段階（道筋）を追跡する必要があること、また瀬戸内海の海上勢力も芸予諸島、防予諸島、周防・安芸・備後・備前の沿岸部、伊予の沿岸部、塩飽諸島、豊後、淡路・摂津地域と地域性があり、しかも瀬戸内に準じる豊後水道、宇和海域にも海上勢力が発生、活動しているから、それらを比較しながら検討すべきであろう。

### 三 二神氏等の「衆的結合」の形成と展開

#### (1) 「関立」という海賊集団

- 貞和5年（1349）10月の東寺領弓削島荘の算用状に警固人として、「野嶋・カノ原大夫房・右馬三郎・オキ嶋六郎・オキ五郎左衛門」らが見え、「酒肴料」「酒直兵粮料」「兵士料」の名目で銭貨が支払われている。→弓削島荘近辺の海賊的領主が雇用されている（契約関係）。かれらは横の連携はあったろうが、指導的な、強大な領主に統率されたものではなく、群立した状態ではなかったかと推測する。ただ気になるのは、「野嶋」という表記である。他は個人名であるのに、野嶋（能嶋）と島名

で呼ばれているのは、それを拠点とした、小規模な海賊領主が結集している様を想定できる（村上氏が中核か）。

- 応安4年（1371）3月に東寺領弓削島荘は、河野久枝新蔵人に料所として預け置かれた。そのとき、「**関立等**」を除くとされており、弓削島荘において細川氏被官化した河野氏一族と別の勢力が競合していたろう。細川氏が南朝方の河野氏に働きかけてその一族の久枝氏を同荘の所務代官に据えたと解するむきもあるが、久枝氏は河野氏一族ながら細川氏被官になっていたとみなすべきであろう。また、この「**関立**」を、同荘の所務代官であった小早川流小泉氏に比定する見解もあるが、小早川氏の性格からいって、考えられない（河合氏、金谷氏の著書参照）。河野氏の息のかかった海上勢力（**関立**）の知行分が存在したとみられる。

☞ 「**関立**」<sup>せきだち</sup>というのは何か？ → 「**山立**」<sup>やまだち</sup>（山賊）に対する、海賊一般をさす言葉。

- 永享6年（1434）に室町幕府は「与州**野嶋関立等**」の討伐を讃岐の塩飽島（衆）に命じているが、小早川氏にも協力させている。野嶋（能島）城に拠った村上氏が「**関立**」と呼ばれていたことが分かる。これは字のとおり、関（海上関）に拠って立つ海賊をさす言葉とみられ、海城と関とが密接不可分の関係であったことが知られる。応永11年（1404）幕府から第2次遣明船の警固を命じられた「前伯耆守通定」は、「**関方**」と呼ばれていて、弓削島荘の請負代官の一人でもあった（当時は守護河野氏に従って在京していた）。これは、「**関**」に所属する海賊の領袖と考えられる。その実名からみて、これは村上氏ではなく、戦国期に村上氏一門化する河野氏一族今岡氏と推定する（位置、官途などからみて）。文亀元年（1501）、幕府が毛利氏へ派遣した使僧の書状中に「四国衆并**諸関立事**」と見え（毛利家文書）、瀬戸内海各地に関を基盤とする海賊が群立し、それらの各々に、小規模の海賊が所属していたと推測。瀬戸内海中央部の海賊らは、関を設立するか、関に所属するかして、戦国期までに海賊

＝関立に近い状況になったとみてよかろう。ただし、関は海上交通の要衝に設けられたので、すべての海賊を包摂したわけではなかろう。能島村上氏が能島城、甘崎城という船折瀬戸、鼻繰瀬戸を扼する海城に関を設置し、海上交通の最重要拠点を掌握したからこそ強大化したのであろう。

## (2) 史料上に見える「衆」に関する記述

- ① 応永12年(1405)9月21日に「能島衆先知行分」であった「忽那島西浦上分地頭職」が忽那通紀(左衛門入道々紀)に宛行われている(忽那家文書)。

☞「能島衆」全体に知行を与えているが、実際には村上氏への給与であろう。

- ② 天文21年(1552)11月17日に河野通宣は、「宅並二神衆中」に越智郡鴨部郷の替わりに「新田弥九郎知行分」(所在未詳)を宛行っている(片山二神文書)。

☞宅並二神衆とは、宅並城(風早郡所在)を防衛する二神氏の集団。二神氏の全体ではなかろう。同衆中のいずれかに新恩の知行地を与えたものか。

- ③ 明応8年(1499)12月7日に河野通宣が「賀嶋衆中」に宛てて掟書を発給している(忽那家文書)。

☞当文書の中に「任久田子以来之旨、弥方々無餘儀可守當城事」とあり、「久田子衆」を起用したとき(クダコ城への在番か)の先例にもとづくという文言が見える。なお「當城」を湯築城と解するむきもあるが、文脈からみて、賀嶋(鹿島)城を指すと解したほうがよかろう。賀嶋城の在番衆を河野氏が統制しようとする意図が分かる。

- ④ 12月9日(明応2年以前)細川政国の「久田子衆御中」に宛てた書状(忽那家文書)。大友氏の豊前守護職辞任、大内氏と同職補任を通知したもの。

☞北九州の政治情勢の変化にともなう不穏な情勢を考慮したものであろうが、なぜ「クダコ城」在番衆(忽那氏か)にその

ような内容を知らせたのか不明。細川政国は細川氏庶家であるが、細川宗家の後見人であり、幕府の意向を受けたとみられる。

- ⑤ 永禄13年(1570)12月1日に河野氏から二神修理進、同隼人佐、「其外**宅並衆中**」それぞれに宛てて同文の奉行人奉書が発給されている(片山二神文書)。

☞河野氏に背いた来島村上氏(牛松丸、のちの通総)への対面禁止、平岡房実父子に対する別心なきようにとのこと、風早郡内各地の所領等について規定。二神氏が三系統に大別され、来島村上氏へ接近している様相が知られる。その一つが**宅並城防衛を目的として編成された**とみられる「**宅並衆**」である。

- ⑥ 同年12月13日に二神隼人佐に宛てた河野牛福(のちの通直)安堵状案、同年12月15日の同文の二神修理進に宛てた河野牛福安堵状案に「一 粟井三分廿五貫、**衆中可申談也**」と見える(片山二神文書)。

☞この「衆中」というのは、宅並二神衆のこととみられ、河野氏から安堵された所領の取り扱いについて、二神隼人佐、同修理進が宅並二神衆に相談をすべきとの命令を下している→河野氏は二神氏一族の自主性を一部認める態度を示している。

- ⑦ 6月1日(天文10年か)に河野通直は「**湊山衆中**」に宛てて、「先日**三嶋衆**中嶋発炎之儀」を知らせている(忽那家文書)。

☞「三嶋衆」とは、三嶋七島の海上勢力、「屋代島衆」などと同様に、地縁的に結びついたもので、当時は大内方に加担したのもいたらしく、河野方の防衛拠点中島(忽那本島)を襲撃したか。それに備えて、和気郡三津の湊山城在番衆に警戒を命じたものであろう。

(まとめ)

上記の②～⑦は、河野氏の軍事的拠点である諸城の防衛を目的として編成された在番衆とみられ、河野氏が統制しようとする意図を読み取れる。主として島嶼、海辺部の海上勢力を起用したものであろう。その反対給付として、河野氏は所領を給付している

が、二神氏の例にみられるごとく、一族の自主性を重んじる態度も示している。①は所領給与を通じて海賊衆を被官化し、警固衆化しようとする河野氏のねらいがうかがわれる。平時の閑立、戦時の警固衆は、海賊衆の「衆的結合」を具体的に示す形態とみてよかろう。

愛媛新聞 平成22年9月7日 日曜日

2010年(平成22年)9月7日 日曜日

10周年記念の講演会



二神系譜研究会設立

二神系譜研究会  
設立10周年祝う  
松山で講演や交流  
二神姓のルーツ研究  
に取り組んでいる二  
神系譜研究会(二神  
後一代表約1200人  
の設立10周年を記念し  
たイベント「ふたがみ  
まつり」が5日、松山  
市の二神島であり、県  
内外から参加した会員  
ら45人が節目を祝っ  
た。

ちが2000年3月発  
足。年1回の会報「海  
の民ふたがみ」の発行  
や、二神島での交流会  
などを開いている。

同日は、二神島の研  
究などを進める神奈川  
大学日本常民文化研究  
所の田上繁所員が二  
神文書目録と解説」と  
題し講演。二神家の系  
譜史料を紹介し、二神  
氏の人的広がりをたど  
った。また、同会事務  
局長が10年間の活動報  
告や、リニューアルし  
たホームページの紹介  
をした。

同会は、全国の二神  
姓にゆかりのある人た  
ちが2000年3月発  
足。年1回の会報「海  
の民ふたがみ」の発行  
や、二神島での交流会  
などを開いている。

愛媛新聞 平成22年9月7日付

## 二神島釣り大会

二神島釣り大会は、午前9時から開始されました、小学生をはじめ数名の参加ではありましたが、二神港周辺で釣り糸を垂れました。午後2時まで競技を続けた結果、松山市立潮見小学校3年生の大内隆政君が優勝し、賞品・賞状が贈られました。隆政君の釣果は、トラハゼ・ベラ・キス・カレイなど15匹でした。2位は二神龍恵さん、3位は二神秀人さんが入賞しました。





優勝した大内隆政君



引きを待つ隆政君

---

## 二神隆政君へのインタビュー

### ◆楽しかったことは何ですか？

カレイを生まれて初めて釣ったことです。二神小学校の前の砂浜で20cm級のみスキカレイを釣り上げました。大きな引きがあって「エサを取られた」と思って竿を上げると大きなカレイが釣れていたので夢ではないかと思いました。

次は、40cm級のマコガレイを釣ってみたいです。次の大会が、楽しみです。

### ◆今度は、二神島で何をしてみたいですか？

島の裏側には何があるのか探検してみたいと思います。そして、二神島全体のいろいろな調査をしてみたいし、絵も描いてみたいです。

---

平成22年9月5日「ふたがみまつり」は、成功のうちに終わりました。会員のみならず二神島の方々や歴史研究家の皆様にも参加していただき、好評のうちに記念行事が閉幕しました。これからは11年目の活動に入っていきますが、これまでの実績を土台にしてさらなる調査研究活動を会員の皆さんや賛同いただける方々と進めていかなければなりません。二神系譜研究への旅に終わりはありません。

# 系譜、家紋紹介 (No.13)

事務局長・二神英臣

## 檮原二神氏 (南檮原、北檮原)

### 1. はじめに

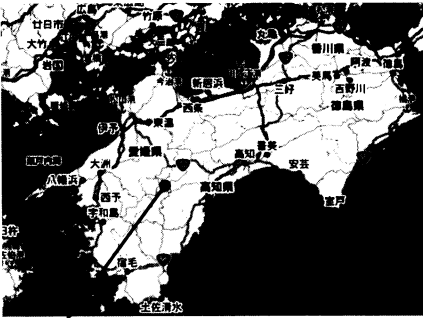
高知県(土佐国)の二神系譜には二系譜あり、一つは九良右衛門を開祖とする幡多郡大月町の小才角系譜。そしてもう一つは尉右衛門を開祖とする高岡郡檮原町上本村の檮原系譜の二系譜です。

小才角二神系譜については会報『海の民ふたがみ』第6号で詳細に報告をしていますので既に多くの方々にも知られてきましたが、檮原二神系譜についてはこれまでのところ系譜調査に取り組まれた記録がありません。檮原二神氏が広く世間に紹介されたのは、作家司馬遼太郎が『街道をゆく』27「檮原街道」(1990年7月20日発行)の中で上本村を訪ねたときの感想で、僅かに茅葺き家と、二神の苗字のことについて触れているだけのものでした。

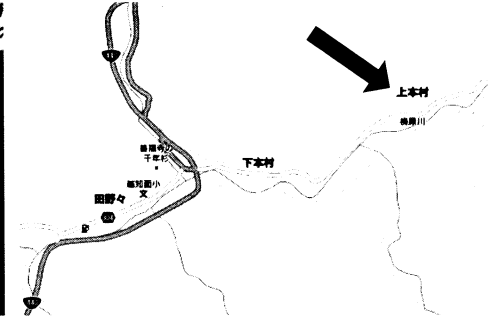
今年度の重点系譜調査が檮原二神系譜に指定されたことにより「しまはく」が終了した直後の11月7日、20日の二日間に渡り取り組まれた檮原二神氏についての聞き取り調査と、フィールド調査の結果を中間報告します。



檮原町上本村全景



上本村 四国地図



橋原地図

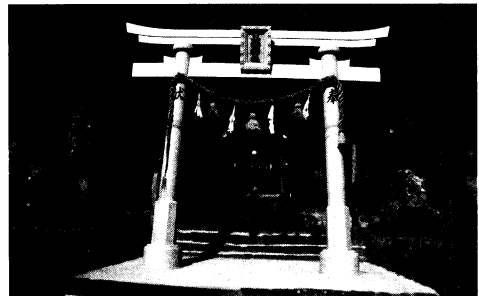
## 北橋原二神氏

### 【由来記】

北橋原二神氏は高知県高岡郡橋原町上本村の庄屋系譜と伝えられていますが上本村宗家最後の当主となった二神保氏（故人）の時代に村を離れ、現在では女系でのみ系譜が継承されています。四面を山に囲まれた上本村の真ん中を流れる橋原川の北側斜面に居住していたことから、ここでは整理上「北橋原二神系譜」と呼びます。菩提寺は曹洞宗系修験宗大福院で、氏神様は伊予国大三島の大山積神を祭る三嶋五社神社です。墓地は居住していた屋敷のすぐ下方にありましたが、数十年前に同系譜が橋原から転居する際に墓石を整理したため一部を残して不

### 北橋原二神氏

菩提寺……………大福院  
 （曹洞宗系修験宗）  
 神 社……………三嶋五社神社  
 墓 地……………上本村同家墓地  
 系図、古文書等……………未確認  
 家 紋……………丸に並び鷹の羽  
 系譜拡大地…四国  
 （高知市、須崎市）  
 系譜会員……………なし



三嶋五社神社

明となっています。系図、文書類は未確認で家紋は「丸に並び鷹の羽」。同系譜は近世になって直系が絶える危機に直面。二代に渡り中越家より養子を迎えましたが女系でしか続かず現在に至っています。

## 南檮原二神氏

### 【由来記】

南檮原二神氏は高知県高岡郡檮原町上本村の真ん中を流れる檮原川の南側斜面に居住していることからここでは整理上仮に「南檮原二神系譜」と呼びます。現在この系譜には三系譜が確認されています。菩提寺は北檮原二神系譜と同じ修験宗大福寺で、氏神様是三嶋五社神社です。墓地は居住地の近くに数カ所に分散して残されています。

### 南檮原二神氏

菩提寺……………大福院  
(曹洞宗系修験宗)  
神社……………三嶋五社神社  
墓地……………上本村同家墓地  
系図、古文書等……………未確認  
家紋……………丸に並び鷹の羽  
系譜拡大地……四国  
(高知市、宿毛市)  
系譜会員……………二神正三

系図、文書類は北檮原二神系譜と同じように未確認ですが家紋は「丸に並び鷹の羽」となっています。

## 1. 聞き取り調査

### 【北檮原二神氏宗家系譜について】

▽中越準一氏（元檮原町長、三嶋五社神社宮司）

上本村の庄屋系譜と伝えられる北檮原二神氏宗家系譜の当主だった二神保氏（故人）は当家中の越家より養子に入った人物です。親子関係を結んだ当時の北檮原二神氏宗家当主二神吉亮もそれ以前に当家から養子に入っていて、越知面地区の区長を二度に渡り歴任しています。結局、二神保氏と二神吉亮は中越家の系図上では甥と叔

父の関係になり、北禱原二神氏宗家系図上では親子関係になるという複雑な関係になっています。このため、二神保氏が数十年前、村を離れる前後に先祖から引き継いだ墓地を整理したものと思われます。そして二神保氏が亡き後、子孫の方によりそれより先に亡くなり葬られていた二神吉亮の墓地の隣地に「二神家の墓」として建立されましたが、この墓地には二神保氏以外は祀られていないと思われます。このように禱原では中越家と二神家とは昔から系譜関係を含めて密接な関係になっていますがこれを調査研究した記録は残されていません。これまでのところ二神保氏没後は、四人の娘さんが嫁いでいったため、北禱原二神氏宗家系譜を継承した人物は確認されておらず、絶家状態となったままです。



中越家にある二神家の墓

#### ▽中越孝氏（大福院の管理者）

禱原二神系譜の過去帳取材で訪問する。

大福院の管理者中越夫人の案内で大福院の本堂を開門して頂いた後、位牌室などを見て回りましたが、「ここには二神氏関係の位牌や過去帳は置いていない」とのことでした。その後大福院を出て坂道を下り切ったところにある中越孝氏のお家の前で話をお伺いしました。

それによれば大福院の過去帳は津野町高野の孝山寺で管理されており調査のためにはそちらに行かないと判らない。とのことでした。

また中越氏については「河野



大福院

氏の庇護を受けて山を越えて禰原にやってきたと聞いています」とのことでした。

#### ▽西森正清氏（現在、北禰原二神氏宗家の屋敷跡に居住）

父の時代に北禰原二神氏宗家の土地、屋敷を二神保氏から譲渡され現在に至っている。

この二神さんは越知面地区では歴史の古いお家で庄屋をしていたと聞いています。父の時代に村を出ることになり当主の二神保さんから譲渡の申し出がありそれを受け入れ移り住んだ



北禰原二神氏墓地跡

んです。元町長の中越準一さんと二神保さんとは甥・叔父の関係であり、以前から親戚関係であったと思います。そのため二神保さんが村を出るとき甥に当る中越準一さんにいろいろとお願いをしていたようでした。上本村では中越氏の方が二神氏より古く、伊予からやってきたと伝えられています。その辺りのことは中越準一さんに聞いた方が詳しいと思います。また、二神保さんの娘さんが時々来られているようですから機会があればお話を聞くと良いと思います。墓地は村を出るときに整理したように思いますが、そのために墓石の一部が墓地周辺にまとめて集められていました。その後墓地周辺を少し発掘すると明和、安永の年号の入った墓石が4霊確認されました。（一覧表参照）さらに発見の可能性があることが判りました。

#### 【南禰原二神氏系譜について】

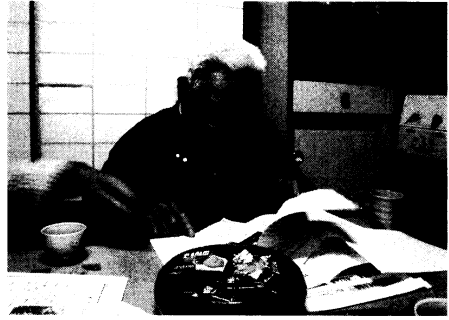
##### ▽二神辰男氏

（南禰原二神氏分家当主、二神会会員の二神正三氏実兄）

上本村二神家の本家は向かいの好屋地に昔住んでいた二神家（北禰原二神氏宗家）ですが、今は娘さんでしか系譜が継承されていません。

こちらの二神家（南禱原二神氏）では三軒が継承されており、最も古い家は二神栄一郎さんの家です。その栄一郎さんも先日お亡くなりになりました。

南禱原二神氏の氏神様は三嶋五社神社、菩提寺は曹洞宗系修験宗大福院、家紋は「丸に並び鷹の羽」となっています。墓地は屋敷近くに数カ所に分かれています。



二神辰男氏

## 2. フィールド調査

### 《1》 寺社調査

#### ▽三嶋五社神社 田野々1295番地

(1) 鳥居横にある慶応2年6月14日建立の三段積の狛獅子台座に寄進者や世話人氏名が刻印され、その中の本殿に向かって右側の狛獅子台座に北禱原二神氏の二神尉右エ門の名前が確認され、左の狛獅子台座からは南禱原二神氏の人物が確認されました。

三嶋五社神社の狛獅子から発見された2名の二神氏の名前と所属系譜  
二神尉右エ門

(北禱原二神氏)

二神 徳太郎 (南禱原二神氏)

旧庄屋諸差出控によれば、天文十七年(1548)中越三河守吉長勧請とあり、伊予(愛媛県)三島において、敵兵に出会った時、三島大明神に祈願し、ようやく勝利を得たので当地に勧請したものとする。

古来、横貝、上本村、下本村、田野々部落の産土神であり、大正二年(1913)諸所より六社が合祀されている。本殿は大正八年(1919)改築。拝殿の彫刻物は門井宗吉作である。

境内の直会殿には、県指定文化財「津野山舞台」がある。

祭 神 大山祇命、五山祇命

例 祭 十一月三～四日

行 事 祭典、御神幸、津野山神楽

『禱原』文芸・史談 2009年第34号より



狛獅子台座に見える「二神姓尉右工門」名

(2) 狛獅子にはこの外、当時の越知面地区に居住した住民の寄進者や世話人氏名が伺えます。藩政時代の当時は名字を公称できる者と出来ない者があり台座にもそれが反映されています。明治直前の慶応2年、寄進者や世話人併せて99名中43名が名字を公称し、この時代になると可成りの系譜が公称していることが判ります。(公称率43%)

この宮は天文17年(1548)中越三河守吉長公が伊予大三嶋から勧請されたもので大山祇命・五山祇命を主神とし、数多くの神社を合祀しています。

三嶋五社神社

宮司 中越 準一

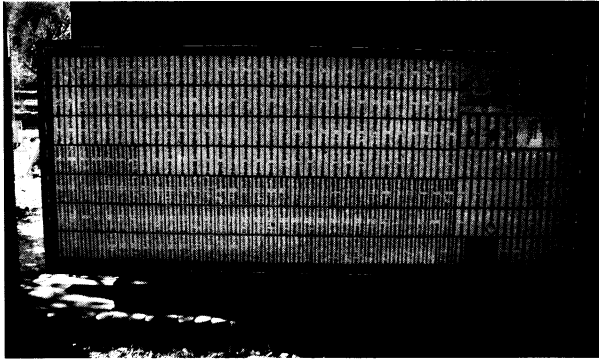
(同神社境内案内板)

(3) 境内には昭和58年7月に本殿屋根葺替え改修をした際、横貝、上本村、下本村、田野々部落をはじめ各地の住民、関係者から寄進を募り二神系譜の次の各氏も寄進されています。

\*昭和58年7月三嶋五社神社寄進者一覧表に見る二神氏の方々

二神 辰男	二神 修作
二神 正三	二神 建樹
二神 栄一郎	二神 弘美
二神 光春	二神 信寿
二神 昇	





三嶋五社神社にある寄進者銘板

▽大福院（曹洞宗系修験宗）下本村552番地

- (1) 大福院は梶原二神系譜の菩提寺で代々の人物の過去帳が保管されているとのことで訪問し調査を行いました。

同寺を管理している中越孝氏夫人の案内で本堂に立ち入り寛永年間に没した人物をはじめ数霊の位牌を調査しましたが、二神氏関係の位牌は見当たりませんでした。

- (2) 大福院の過去帳は以前はこ

こで保管されていましたが、今では津野町高野の孝山寺で管理されています。とのことで、この日の調査は断念し、第三次以降の調査課題に繰り越すことにしました。

- (3) 大福院の本堂内には昭和57年11月の本堂屋根改築の際に寄進された上本村、下本村、太田戸、越知面区、田野々、永野、井の谷地区の方々の氏名が掲載されていましたが二神氏は次の三名でした。

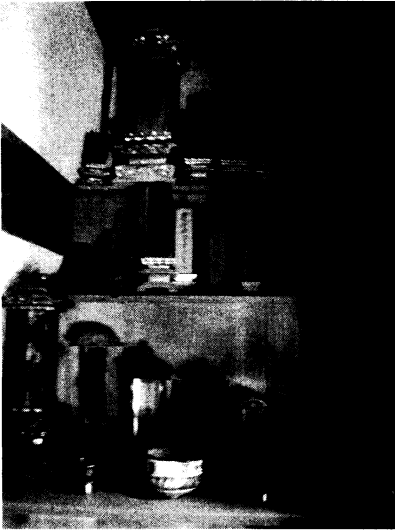
下本村 二神 辰男  
二神 昇  
二神 光春

大福院は元和三年（1617）に開基された。本尊は、延命地藏で中越三河守吉長、中越長左衛門正友の位牌も安置されている。

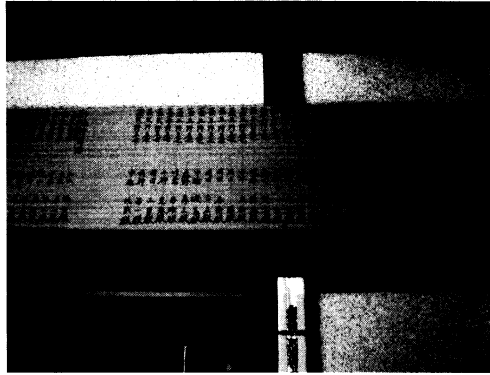
安政五年（1858）再建。

境内には、三個の力石があり、これを與門三郎という者が、一個を背負い、二個を両脇に抱えたといわれているので力石と呼ばれている。

『梶原』文芸・史談 2009年第34号より



大福寺位牌堂



大福寺にある寄進者銘板

## 《2》墓地調査

【北檮原二神氏宗家系譜】 二神保家墓地

### 北檮原二神氏墓地調査記録

	墓石正面	左側面	裏面	右側面	西暦
1	二神茂平	明和六丑天十一月九日	なし	安永四未天四月十五日	1769
2	〇〇新衛門〇女	安永六丁酉四月廿九日 新衛門妻サイ	なし	安永三申年五月十六日	1774
3	二神茂八墓	三月十九日	なし	文化四丁卯年	1807
4	二神嗜助子	六月廿三日 東作	なし	文化二丑	1805

### 【北檮原二神氏墓地調査中間報告】

- (1) 北檮原二神氏宗家墓地は上本村北斜面に二段に渡って構築されていましたが、墓石は数十年前に宗家が檮原から転居する際に整理したことが判っています。その整理先がどこであったのかにつ

いては現時点では不明のままとなっています。

- (2) 整理された宗家墓地の二段目には整理を免れた数基の墓石が残されており、調査した結果4霊の詳細が判明しました。それによれば4霊の中で最古の人物は明和6年11月に没した人物で、約250年以上前に活躍した方で南禱原二神系譜の最古の人物に比較して30年ばかり新しいことが判明しました。
- (3) 残る3霊の方々は、安永と文化年間に亡くなった人物で、宗家である北禱原二神氏の墓地にはこの墓石以外に相当数の古い墓石が存在していたはずで、その証拠として一段目には梅の木の彫刻の入った立派な灯籠の台石や、屋根に家紋や彫刻が施された元禄墓が確認されています。しかし肝心の戒名や俗名、没年月日等が刻印された竿石が発見されていません。今後機会を得て宗家墓地の一段目、二段目を発掘すればまだまだ墓石が発見される可能性が残されていることが判明しました。
- (4) 北禱原二神氏宗家の祖先は、これまでに発見された墓石等で見る限り江戸中期である1700年代の前半頃から始まったものと見られますが、今後の調査結果次第ではもう少し遡ることも考えられます。そして次の段階であるそれ以前の二神系譜の出自が今後の調査課題となります。
- (5) 前頁の一覧表は、北禱原二神氏宗家墓地で発掘された一部の墓石からの調査であり、津野町高野の孝山寺に保管されている過去帳との対比は行っていません。今後過去帳と残る墓石調査を行いさらに古い人物が発見される可能性があります。



北禱原二神氏墓地跡の墓石

【南檮原二神氏宗家系譜】 二神栄一郎家墓地  
 二神辰男家墓地  
 二神政次家墓地

南檮原二神氏墓地調査記録

	墓石正面	左側面	裏面	右側面	西暦
1	畝 二神喜衛門墓	六月十五日 六十三歳	なし	元文三戊午夭	1738
2	二神喜衛門女	七月十三日	なし	延享五辰夭	1746
3	畝元春林慧芳禅定尼	宝暦十二午正月三十日夭	なし	なし	1762
4	花山妙歸禅定女	天明元丑年九月廿二日	なし	二神常七后妻	1781
5	歸元覚應了心禅定門	寛政元己酉歳正月十六日	なし	二神常七墓	1789
6	本覚圆心信士 畝元 妙覚貞圓信女	二神尉助 行年五十四歳	なし	妻 下元氏女 享年七十二歳	1816
		文化十三未十二月十一日		天保六未 八月二十七日卒	1835
7	二神尉助女	享年三十歳 俗名令	なし	文政十丁亥 六月十日夭	1830
8	二神常八墓	畝元 狐松常心信士	なし	嘉永六癸丑 九月十四日 享年59歳	1853
9	二神常八妻	行年六十六才 さわ	なし	明治五年申 十月廿五日	1872
10	秋候妙芳信女	二神徳太郎妻 よ志	なし	元治元甲子 七月二十九日	1864
11	観雪遊道信士	二神徳太 八十歳	なし	明治三十九年二月十一日	1906
12	貞教妙雪信女	徳太後妻 をなか	なし	明治四十二年十二月十二日	1909
13	二神蘭吾墓	清馬の父 行年九十一歳	なし	明治三十二年五月十八日没	1899
14	二神於邁惠墓	蘭吾の妻 行年七十一歳	なし	明治十三年一月十二日没孫安吉建	1880

\* 平成、昭和、大正時代に亡くなられた人物は省略。

【南檮原二神氏墓地調査中間報告】

- (1) 南檮原二神氏墓地 4カ所の墓石14霊の中で最古の人物は、272年前の元文3年6月に没した二神喜衛門で、宗家である北檮原二

神氏墓地で発掘された人物の没年月日と一世代程度の31年の違いでしかない歴史を構成しています。

- (2) この事実から袴原上本村に二神氏が住み始めたのは最小に見ても300年以上前の宝永、元禄時代まで遡ることが考察されます。
- (3) 14霊の方々は、各年代に亘ってお亡くなりになっていて、この墓地以外に古い墓地が無ければ南禱原二神氏の祖先は、墓石等で見ると江戸中期である1700年代の前半頃から始まったものと考えられます。が、それ以前どこから来たのかが今後の調査研究課題となります。
- (4) 前頁の一覧表は、三カ所に分散する同系譜墓石の調査内容であり、墓石と過去帳、位牌との対比や系図上での位置づけは行っていません。今後過去帳、位牌調査を行い墓石と一致するかどうか、過去帳、位牌にさらに古い人物が発見される可能性も残されています。
- (5) これらの作業を行った上で、南禱原二神氏各系譜、北禱原二神氏各系譜との対比を行うことが系譜の流れと広がりを知る上で重要です。

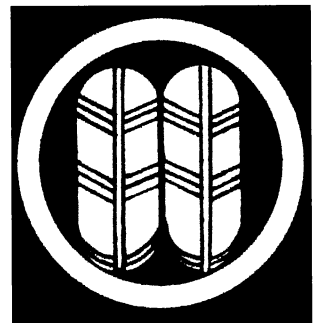


二神喜衛門の墓石

### 【禱原二神氏家紋紹介】

禱原二神氏の家紋は「丸に並び鷹の羽」と呼ばれるものです。宗家の北禱原二神系譜も南禱原二神系譜も同じ家紋を使用しています。

鷹の語は、高く飛ぶことから来たといいますが、「鷹紋」および「鷹の羽紋」は他の鳥獣を狙う勇猛な鷹の性質を好んだところから生まれたものです。



「丸に並び鷹の羽」

たしかに、鷹は小型ではありますが、猛鳥で、生きた鳥獣を捕って食べる。鳶は同じワシタカ科の鳥ではありますが、生きた鳥獣を捕って食べることはありません。

鷹は、日本では約20種類あると云われますが、クマタカ、オオノスリのように大型のものから、小型のツミなどいろいろあります。ハヤブサもその一種です。

鷹羽紋 鷹の羽紋は、鷹紋とまったく同趣旨によって生れたことは明瞭です。

鷹の羽は、ことに中世においては、武官のかぶる武礼冠にさされたことでもわかります。

鷹の羽紋は、はじめて史書に見えるのは「蒙古襲来絵巻」です。菊池武房等の旗にこの紋がついています。この菊池氏というのは、藤原隆家の後裔でその子孫の降定のとき肥後の国を賜わって、その一門が栄えました。西郷、小島、兵藤、山鹿、藤田、村田、伊芹、合志、迫、永見、岡本、坂本、高木、草野、上妻、妻住、佐野、永野、堀川、八代、出田、片隅、大浦、小山、小野崎、林原、石坂、加江、城、赤星、若宮、長瀬、重富、深川、高瀬、託摩の諸氏があり、ほとんどが、鷹の羽紋を用いています。

菊池一族は、菊池郡河辺に住んでいましたが、あるとき、阿蘇明神から神託の歌があり、そのうえ、夢のなかに、神馬および鷹の羽紋を幕紋としてたまわったといえます。(北肥戦誌) その歌は、つぎのようなものでした。

浅くとも深くたのめよ菊池川 阿蘇のけむりの立たんかぎりは

いまでも阿蘇神社は鷹の羽紋を紳紋とし、神官の阿蘇氏もまたこの紋を用いています。

「太平記」では、新田義興もこの紋を用い、この紋は、菊池氏以外でも使っていたことがわかります。足利時代になるとしだいにひろまり、「見聞諸家紋」には「欄干欄丸に鷹の羽」は町野敏康、「三本鷹の

羽」は讃岐の稲毛氏、「抱き鷹の丸に二引両」は美馬氏、「一引両にちが鷹の羽」は摂津の太田氏、「ちが鷹の羽」は福井氏、「五本鷹の羽」は加賀の金光氏、「鶴巻にちが鷹の羽」は中村氏となっている。徳川時代になってから、この紋章はますますひろまり、大名、旗本を合わせると百二十二家にもおよびました。

元禄十五年（1702）大石良雄ら四十七士の「義士の討入り」は有名ですが、この仇討ちのあとに、つぎのような狂歌が江戸市中にあらわれました。

鷹の羽のいきほひつよき紋どころ 竹に雀はちゅうのねも出ず

鷹の羽は浅野氏の家紋、竹に雀は上杉氏の家紋。浅野氏の威勢のまえには上杉氏はとうていかなわず、すっかり参ってしまいました。雀の鳴き声に忠の字をかけているが、当時の庶民の感情が生き生きと出ています。『家紋知れば知るほど』より

### 《3》文献調査

#### ▽土佐藩における庄屋について

土佐の庄屋は土地の代表のような存在で、年貢などを領主に上納したり、村の治安をまもる事などが仕事で、自己の地位と職分に対して誇りを持っていました。

関ヶ原の戦功により山内一豊が土佐へ転封される事になると長宗我部家の家臣、一領具足らは激しい抵抗をみせますが山内家に弾圧され、彼らは土佐各地に散在します。山内家は抵抗した遺臣らを懐柔する目的もあり郷土として取立てますが、一領具足の中にはそれを拒み、そのまま地域に根付いて庄屋になる者も少なくありませんでした。その後慶長18年に慶長郷土と呼ばれる郷土が誕生すると、庄屋の支配下に置かれます。

しかし寛永13年に庄屋の支配下に置かれていた郷土を土佐藩は土佐藩の直属に配置転換し、公用文書も庄屋を通さなくなったのです。また貨幣経済の進展と商品生産や流通と共に商人層が力を持ちはじめ

め、商人や豪農らは郷士株を取得して郷士になり、庄屋の管理から外れました。庄屋は村内で強い影響力を持てなくなり、次第に『地方の役人』という役目から村々を転勤するという事が増え、地域に根付くという事がなくなりました。商人層の台頭があり江戸時代当初と比べると、その扱いも低いものになっていったのです。

### **\*庄屋の構造**

庄屋は村方における地主、富農でしたが、土佐藩のように田地の比較的狭いところでは、絶対的な田地の広さではなく、庄屋居住の村方における相対的な田地の所持が問題となりました。土佐藩でも初期の頃の庄屋には出身村の地主を任命し、地主経営が庄屋の家計を支える要素となっていました。庄屋は藩政の末端として、藩政全般について問題意識を持たざるを得なければ業務遂行が出来ませんでした。

### **\*庄屋と商品経済**

寛永13年、それまで庄屋の支配下にあった郷士を土佐藩の直属に配置転換し、制度改正が実施されました。また、貨幣経済の進展と商品生産や流通の拡大と共に商人層が力を持ち始め、商人や豪農らは郷士株を取得して郷士になり、庄屋の管理から外れてゆきました。このため庄屋は村内で強い影響力を持てなくなり、次第に「地方の役人」と云う役目から、村々を転勤する事が増え地域に根付く事がなくなり藩政時代の当初と比較して幕末頃には庄屋身分の実態が低下していました。

庄屋の転村、転浦と直接関係するのは天明改革以来の土佐藩の支配方針が、庄屋層にとってはなほだ冷たかったことであると考えられます。

### **\*庄屋と明治維新**

幕末期土佐藩における庄屋層の動きが、明治維新に通ずるものであることは、維新の志士に吉村寅太郎をはじめ庄屋出身が多いことからすでに注意されていたものです。天保12年（1841）密約した土佐藩庄屋の「同盟談話の条々」はここに示顕された思想と精神は高岡郡、土佐郡、吾川郡などの庄屋層から支持されました。



## **\* 庄屋同盟**

土佐藩では各地を取り仕切る為に「郷」「浦」「町」に区分し三支配と称して、地下役人の席次も郷庄屋（農村を主体とする郷）、浦庄屋（漁村を主体とする浦）、町役（町方を対象とする町）の順に決まっていました。

天保8年4月前浜村の伊都多神社の祭礼の際、商人層、町役が、席次を無視して郷庄屋や浦庄屋の上座に着こうとする事件があり、庄屋は重大事件として井口・小高坂・潮江・江ノ口の庄屋は訴訟文を起草し郡奉行に提出します。

そして天保12年、町役ら商人層や自己の支配下の郷村における苗字帯刀者の横暴、その地位や職分の不当な取り扱いを改善する事を目的に、土佐・吾川・長岡の三部の農村庄屋を中心に秘密同盟（庄屋同盟）が結ばれたのです。この庄屋同盟では、52箇条の「同盟談話の条々」という盟約を結び、起草文には国学を織り込み「古式復帰」や「格式保持」を唱えました。

## **\* 庄屋の転村、転浦**

「庄屋同盟」の指導者は細木庵常で、高岡郡新居村に代々庄屋職を務める細木家に生まれ、文化8年に庄屋職に就任すると新居村をはじめ野市、諸木、伊野などの庄屋を歴任した人物でした。

土佐藩では貨幣経済の進展と商品生産や流通の拡大と共に、「庄屋は利潤を追求することなくして役職を完遂することはできない」との方針を打ち出し、庄屋を単に監督するにとどまらず、これに信賞必罰をもってのぞみ、その勤務の評定を強化する方向に向かいます。このため、これまでのように、伝統的な家筋によって庄屋役を勤仕する者から、書算の才能をもって縦横に村落を経営する庄屋への転換を推進します。藩は能力のある庄屋を抜擢してこれに転村、転浦を命じる一方で、必然的に藩の定める基準に達しない庄屋への扱いも発生しました。

## **\* 庄屋の思想教養**

「庄屋同盟」の指導者細木庵常は今村楽に国学を学び、経学や和歌に通じた人物で、晩年には武市半平太の叔父にあたる土佐最高の

国学者である鹿持雅澄に師事しています。「同盟談話の条々」では、将軍も大名も庄屋も同じ天皇の臣であると唱え、国学の思想が強く盛り込まれていて、庄屋職を務める者達が尊皇思想を学んだ跡が見えます。庄屋の中間的地位に苦しんだ細木庵常など「庄屋同盟」に連署した者たちは藩政の矛盾を痛烈に味わいます。その時彼らに映った藩政の矛盾は、藩役人層の腐敗であり墮落であり無能でした。坂本龍馬など下士が上士に激しく持った対立感情を、庄屋層もまた別に持ったものではないでしょうか。

### ▽中越氏について

**中越**（なかごし） 信濃の中越氏は中越郷（長野県上伊那郡宮田村）発祥。鎌倉時代に地頭となる。応永七年（1400）の大塔合戦の小笠原長秀方に中越備中守の名が見える。江戸時代は加賀藩士に中越氏がいた。現在は高知県高岡郡に多い姓。梶原町では2位の姓の三倍以上に及ぶ圧倒的な最多姓で、周辺の仁淀村や東津野村にも多い。（『日本名家系大事典』東京堂出版より）

#### **中越豊前守吉高の墓** 下本村443番地2

中越家の系図によれば鎌倉幕府執権北条氏の子孫、名越十郎重麿の長子で、応仁年間（1467～1468）一条公の招きにより伊予（愛媛県）を経て土佐に入り、文亀2年（1502）津野氏に仕え、越知面を領し、鷲ヶ森城を構えたとある。

永正14年（1517）4月死去。中越豊前守は、本町の中越姓の始祖である。祖霊社三河神社で昭和49年（1974）中越開祖500年祭が行われた。

#### **鷲ヶ森城** 上本村1309番地 下本村756番地

中越豊前守吉高が、文亀2年（1502）三宝山の上に築城したものである。

詰めの段、二の段、掘り切り、空堀跡、石垣などの一部が残っている。

### 中越三河守父子の墓 下本村804番地

中越豊前守吉高の長子が三河守吉長であって、吉長の子が甲斐守吉家であり、その父子の墓である。

始め一条氏に仕えたが、のち津野氏に仕えた。天正8年（1580）に長宗我部元親の懇情により、吉長、吉家父子は伊予（愛媛県）三滝、甲の森の戦いに赴き9月10日敵将、紀肥後守（北野川親安）を攻めてこれを降ろした。－「清良記・津野山異談続編」－とあるが、この戦いで甲斐守吉家は同年庚辰2月10日戦死したことが墓碑に刻まれている。

天正11年（1583）1月には再度三滝城を攻め紀親安軍を滅ぼした。－「大日本史料・その他」－

また、三河守吉長は天正14年（1586）3月10日死去とあり、後裔には庄屋職を勤めた家系もある。

### 中越長左衛門の墓 田野々1269番地

中越長左衛門は、キリスト教を信仰し、異教徒として土地の者に嫌われ、慶長2年（1597）7月20日殺害された。

その後、悪疫が流行したのは、長左衛門のたたりだと云うので祠を建て、念仏祭を行ったと云われている。

墓碑側面に「曹寛政元歳次己酉十月建之」とある。

（『梶原』文芸・史談 2009年第34号より）

「中越君。町長さんも中越さんだけど、やはり親戚ですか」

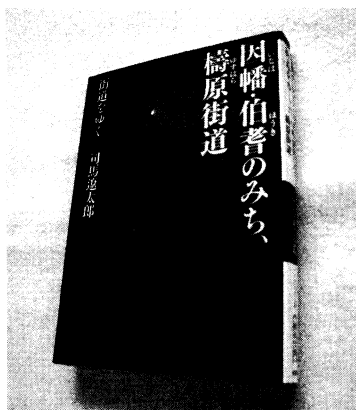
「もとはそうでしょうけど、町長さんは越知面の中越です」

「越知（智）」というのは、上代、伊予の大族で、伊予そのものを代表できるほどの呼称でもあった。いまもとなりの愛媛県（伊予）では郡の名（越智郡）としてのこっている。梶原に、字の名として越知面

という地名がのこっていることをみても、遠い世、禰原に入って田畑をひらいたのは伊予人であったことがわかる。

食後、越知面地区へ行った。

この地区の上本村というやや広やかな水田地帯に入っていくと、山麓の段々畑の上に、草ぶきの家屋が、三戸七棟、指定保存されていた。大小の屋根の重なりぐあいが造形的にもうつくしく、禰原の心をはればれと感じさせる景色だった。三戸とも苗字が二神という同姓であることも、ほほえましかった。『街道をゆく』27「禰原街道」より



#### 【参考文献】

『禰原町史』（1968年）

『高知県史』（1970－1978年）

『禰原』文芸・史談（2009年第34号）

『街道をゆく』27「禰原街道」（司馬遼太郎・1990年7月20日発行）

『日本名家系大事典』（東京堂出版・2002年7月10日発行）

「庄屋同盟・みねうち道・高知県の歴史」（ホームページより）

#### 《4》聞き取り、フィールド、文献調査のまとめ

（第二次調査迄の中間報告）

##### ▽禰原二神系譜の出自について

禰原二神系譜の出自については二次に渡る各種調査を踏まえて二つのケースの考察が浮かび上がって来ています。

##### 第一のケース

南禰原二神系譜墓地から発見されている人物の没年月日から推定した現役年代は元禄、宝永、正徳、享保のいわゆる江戸前期から中期にかけての頃と見られます。宗家である北禰原二神系譜の人物はまだ一部しか発見されていないので明確ではありませんが、

もう一代位前に設定したとすれば寛文、延宝、天和、貞享の頃が現役年代と推定されます。

「土佐藩における庄屋について」の項でも述べたように藩政時代に、個人や自家の都合で居住や職業を変えたり、ましてや藩を越えて越境移住することは、ほぼ不可能であることから、梶原二神系譜がこの地に來所した動機として考えられる第一は、土佐藩の指示による「庄屋の転村、転浦」に伴って梶原に移り住んだことが考えられます。

次に「庄屋の転村、転浦」とすれば同じ土佐藩内での二神系譜は小才角二神氏しかありません。小才角二神系譜の系図上でこの時代に対応する人物の関係者及び分家の調査の必要性があります。

### 第二のケース

次に第二のケースとして考えられるのは梶原二神系譜が藩政時代以前に土佐国に移住していた場合です。梶原で二神氏と関係の深い中越氏は「応仁年間（1467～1468）一条公の招きにより伊予（愛媛県）を経て土佐に入った」と伝えられています。この時代の二神氏は、道後で討ち死にした二神種の時代ですが、周防の大内氏や讃岐の細川氏との戦いに明け暮れていた二神氏が土佐国に移住する理由は見出しにくいのではないのでしょうか。

### ▽津野山一揆と庄屋層の転村、転浦

土佐勤王党が結成される土台になったのが「庄屋同盟」でした。高岡郡、土佐郡などの庄屋が同盟を結び、高岡郡に所属した梶原二神系譜の庄屋もこれに参加していた可能性がありその足跡の調査が求められます。その前哨として考えられるのは宝暦（1755）に起こった津野山一揆です。お茶や楮などの間屋買い付けを巡り発生した事件で郡奉行所により鎮圧され、関係者23人が召し捕えられました。次いで津野山9名庄屋の内、越知面、船戸、四万川、梶原、北川、初瀬、中平、松原の各庄屋が入牢となりました。津野山一揆の責任者は斬首となるなど悲惨を極めました。

これら事件の後、土佐藩は庄屋層の転村、転浦を命じ一部の庄屋

の差し替えを行ったものと考えられますが、二神氏の梶原入村もこのような形で行われたのではないかとの推測は捨てきれません。調査の継続を必要としています。

### ▽中越家と梶原二神家との関係をどう見るか

越知面地区で最も歴史を持つ中越氏と二神氏との関係をどう見るのか。という問題があります。中越氏については報告にあるように「応仁年間（1467～1468）一条公の招きにより伊予（愛媛県）を経て土佐に入り、文亀2年（1502）津野氏に仕え、越知面を領し、驚ヶ森城を構えた」とのことでした。その後二神氏との関係では幕末から明治にかけては養子縁組をして絶家を克服したり、また逆のケースもあった可能性があります。お互いに村方の責任ある系譜として両系譜関係の調査は重要です。

### ▽今後の取り組みについて

第三次梶原二神系譜調査の項目と必要性

北梶原二神系譜については現時点で墓石が4霊のみ発見されているのみで、かつて存在していたであろう300年間に及ぶ数多くの墓石や過去帳の存在も未確認のままです。

従って、これらの系譜史料のさらなる調査確認を継続するためには、第三次調査の重要性が認識できます。

第三次調査のポイントは、

**第一**に引き続き北梶原二神系譜の墓石発掘調査の継続を行うこと。

**第二**に梶原二神系譜の菩提寺大福院の過去帳を保管中の津野町高野の孝山寺に訪ね全霊調査を実施すること。

**第三**に第二次調査で訪問した三嶋五社神社に残る古文書や「旧庄屋諸差出控」などの文書調査の続行です。

## トピックス

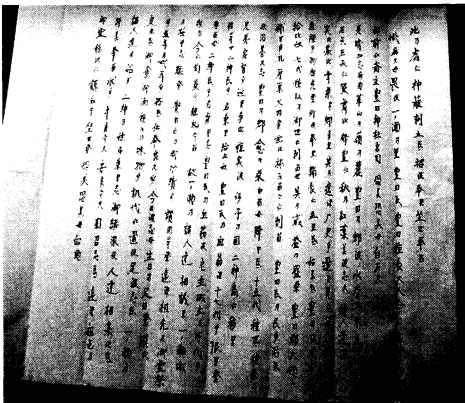
# 20回目の「豊田氏慰霊五年祭」に 当会から15名が出席

平成22年4月10日、山口県下関市豊田町一ノ瀬において「豊田氏慰霊五年祭」(旧豊田種長追善供養祭)が行われました。二神氏遠祖の地、長門国豊田郷で大正5年4月以来5年毎に豊田町一ノ瀬地区の方々によって開催され、今回が20回目を数えます。会場の一ノ瀬薬師堂に多数の関係者が集まり、当会から15名が出席しました。



一ノ瀬薬師堂での神事

## 豊田氏の遺徳を偲び30数名が出席、奏上祝詞文書は名文



奏上された祝詞文

空は少し曇りがちで風があったものの、時折晴れ間が広がる中、慰霊祭は午前11時に神式で始まりました。地元一ノ瀬地区の皆さんをはじめ、豊田氏保存会、豊田町関係者に加え、招待いただいた二神系譜研究会関係者合わせて30数名が出席しました。藤村増雄氏の進行により、豊田神社鳴瀬道生宮司の祭祀次第に沿って進められました。

鳴瀬宮司が奏上された祝詞文書は、出席者の心に残る名文で次のような要旨です。

「大和国から豊田に来郷し、都の文化を伝えながら善政を敷いた時代を回想し、その後、豊田氏代々の施政を経て豊田種家が伊予国二神島に移住。豊田氏の絶家、滅亡を迎えるが、その系譜は伊予国二神氏に継承され、今以て連綿と続き、後に豊田氏の慰霊と共にその志が発展している事を喜ぶものである」

## 今後とも、豊田・二神の交流を願う

慰霊祭の神事は午前中で終わり、場所を一ノ瀬公会堂に移して直会が開会されました。紹介された二神浩三会長は、「一ノ瀬の皆様には豊田氏をこのようにお祀りしていただきありがとうございます。豊田種長は700年前、本人は不本意ながらも幕府軍として伊予へやってきましたが、そのときのことを特集した会報を昨年末に発行しましたので、読んでみてください。今後とも、一ノ瀬の皆様とはお付き合いをしていきたいと願っておりますので、よろしく願いをいたします。」と挨拶を行いました。

また、豊田郷に二神氏の存在を伝えることに功労のあった二神種昭氏も紹介され挨拶を行いました。続いて、白石雅宏豊田氏保存会会長、吉本知則前豊田町長が挨拶。そして、西本乙美一ノ瀬区長の音頭で乾杯しました。

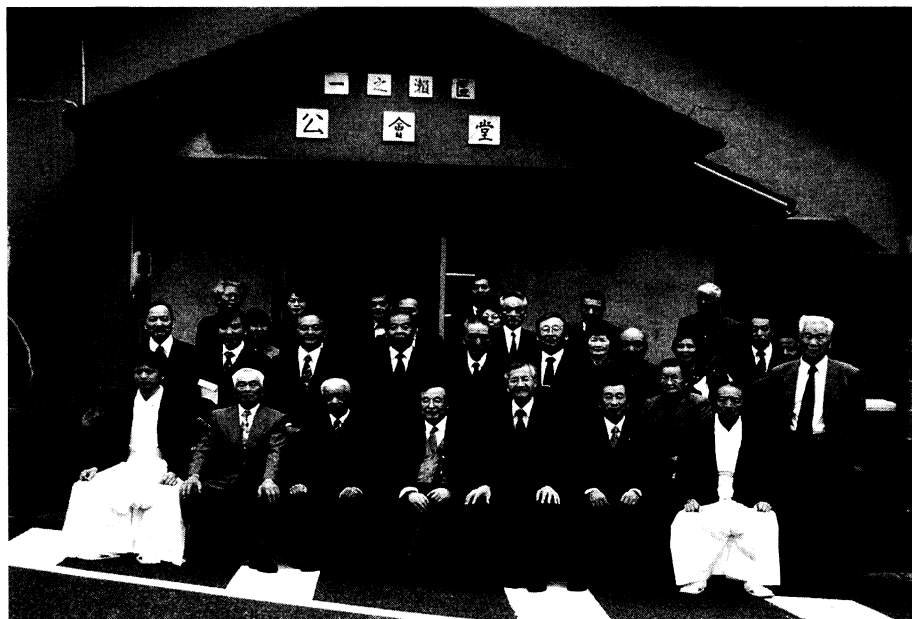
## 「ふたがみまつり」、「松山しまはく」をご案内

歓談が進んだ頃、二神英臣事務局長から、先月の大雪で「館の椿」が雪害を受けた件で、豊田氏保存会へお見舞いの申し出をしました。

そして、「今年は、二神系譜研究会創立10周年にあたり、記念行事を9月5日に『ふたがみまつり』として予定しています。一ノ瀬地区



や豊田氏保存会からも参加いただくようご案内をさせていただきます。  
『ふたがみまつり』は、4月から10月までの半年間に亘り開催される  
松山市主催の『しまはく（松山島博覧会）』に関連して開催する予定です。」と、紹介を行いました。



豊田町一之瀬地区公会堂前（平成22年4月10日）

# 浩三さんとの最後の山口小旅行

副会長 二神 俊一

「浩三さん、山口行きの時、どこへ行きたいですか？行ってみたいところがありますか？」と尋ねると、「俊一さんが決めてくれたら、どこでも構わないよ」「場所は任せるから」。浩三さんとの、そのような、やり取りがあったのは、まだ沈丁花の匂いのする平成22年2月末頃でした。

4月10日（土）に「二神系譜研究会」総会および「豊田氏慰霊5年祭」が山口県下関市一の俣温泉で開催されることになっており、我々は、松山から行くので、浩三さんらとご一緒するのが定番になっていました。今回、浩三さんらとご一緒するのは、4回目である。ということは、5年毎だから、初めて「豊田氏慰霊祭」に出席してから、15年の月日が経ったことになります。

山口までドライブするのなら、私が前の日（4月9日）金曜日に休暇をとれば2泊3日の小旅行が可能なので、予ねてから、小旅行について、浩三さんと、話し合いをしていました。その後、暫く私も、忙しさにかまけて旅行先に選定については放念しておりました。

3月の下旬に、日時も迫ってきたので、再び浩三さんへ電話して、「長門・湯本辺りはどうですか？」と聞いてみましたが、相変わらず、「俊一さんに全部、任せるから」のことでした。

うーん、全部、任せるといわれても、さて、どうしよう。HPでいろいろ調べてみても、あんまりゆっくり検討する間がないので、「温泉があれば、いいだろう」と適当に「ホテル長門はらだ」を予約したのでした。（多分、以前に浩三さんは、長門あたりは行っているような感じではありましたが。）

同じ車で行くメンバーの寿弘さんへも経緯をお話して、山口行きの2泊3日のスケジュールをFAXで送付して了解を得て、今回の小旅行の行程は決まったのです。

4月9日朝、新型レガシー・アウトバックに荷物を詰めて、先ず横

河原の寿弘さんをピックアップし、それから樽味の浩三さん宅へ寄り、ご夫妻を乗せて全員5名で三津浜港へ向かいました。

三津浜港の切符売り場には、「松山しまはく2010」のチラシが置かれており、島博もいよいよ盛り上がってきたのだな（感心！）。浩三さんらに「しまはくのチラシがおいてありました」と、チラシをみせて「4月29日のオープニングイベント」には行きましょう。と誘ってみました。

フェリーは既に予約していて、平日でもあったせいか空いていた。松山から柳井港まで約2時間半の行程です。フェリーでは、浩三さんご夫妻は客席の最前列に陣取り、まるで、子供が遠足にいったような、嬉しそうな顔をして、景色をカメラに収めていたのが、特に印象に残っています。浩三さんがニコニコして嬉しそうにカメラのシャッターをきっているお姿をみて、思い切って、ご一緒にお連れしてよかったなあと思いました。14時過ぎに柳井港へ到着してから、長門湯本温泉までは、ひとつ走りでした。

以前は、専らワイフが地図や標識を見て道案内をしてくれていたのが、最近では、カーナビに行き先をセットし、指示どおりに運転すればいいので楽になったものです。夕方、時間的にも、ゆっくり宿に着くことができました。一の俣温泉は、山間の静かな温泉地であり、リラックスするにはもってこいでした。

夕食は5名全員で会食することにしていたので、それまで、ゆっくり温泉に入りました。浩三さんは少し足が不自由なため、湯船に入ったりするのを手助けしたりしながら、のんびりと温泉に入り、四方山話をしながら、リラックスすることができました。温泉の部屋の外に露天風呂があったのですが、階段があり、そろそろ、浩三さんの手を引いて露天風呂にもご案内しました。

お風呂は二人だけだったので、浩三さんが「来月には手術をしないといけない。もう戻ってこれんかもわからん」といつになくしんみりというので、「どんな手術なんですか？」と尋ねると、胸部大動脈瘤切除・人工血管埋設の手術であることがわかりました。

詳しいことはよくわかりませんが、なかなか難しい大手術であろう

ことは想像できました。「そんな、戻ってこれんとか、縁起でもないことは、云わんといて一な。最近の医術の発達は凄いから、松山市民病院の先生にお任せするしかないですよ。大丈夫ですよ」と、いうのが私としては、精一杯でした。

あとで、帰ってから、インターネットで調べてみたら、胸部大動脈瘤の切除の手術は、リスクもあり、かといって、しない時のリスクなど、結構厳しい選択肢であることも分かり、これは大変な決断だなあと、複雑な思いで一杯でした。

その旅館特有の夕食は、山菜中心のご馳走で、風呂上りでアルコールも入りいい気分でした。いろんな話に花が咲いたことはいうまでもありませんが、浩三さんにとっても、至福の一時であったように感じました。

その夜、カジカの鳴き声で、眼が覚めました。カジカの鳴き声など聞くのは本当に久しぶりでした。やはりここは相当な山間だなあと驚きました。

長門湯本から一の俣温泉は近いので、翌朝もゆっくりドライブし、「豊田氏慰霊5年祭」会場の豊田町一の瀬薬師堂へ向かいました。風は強いものの晴天で慰霊祭には都合はよかったです。顔なじみの地元のお世話人にご挨拶などしてから、「館の椿」を早速見に行きました。この冬の豪雪で、雪の重みで椿の枝が折れたとの連絡を受けていたので、心配になっていましたが、地元の有志の方が、簡便に修復してくれていました。今回も、紅白の入り交じった八重の花を咲かせていて、安堵しました。

その後、豊田氏5年祭が今回は神式で厳かに行われた後、公民分館での直らいの懇親会が和やかな雰囲気で行われた。夕方、一の俣温泉グランドホテルにチェックインしてから2010年度「二神系譜研究会」総会を開催しました。あとの懇親会も盛り上がり、カラオケで自慢の喉が披露されたのです。

翌日は、午前中 神上寺の視察をした後、道の駅で買い物をして、それぞれ松山へと帰ってきました。ゆったりした二泊三日の小旅行でした。

旅行の写真を浩三さんが、沢山送ってくれたのが5月中旬でした。それが、その1ヵ月後に他界してしまい、未だに信じられません。

今回ご一緒させて頂いたのが最後の旅行となってしまいました。浩三さん、楽しい思い出を有難うございました。ニコニコと優しいお顔が忘れられません。

浩三さんのご冥福をお祈り申し上げますと共にご家族のご多幸をお祈り申し上げます。  
(平成22年12月10日記す)



(館の椿の前にて記念撮影) (平成22年4月10日)

## シンポジウム 「忽那諸島の歴史を探る」が中島で開催

関口博巨氏（日本常民文化研究所）が講演

平成22年9月4日（土）、午後0時30分から中島総合文化センター（松山市中島）に350人が参加して、シンポジウム「忽那諸島の歴史を探る」が開かれました。これは、「しまはく（松山島博覧会）」の関連事業で、このシンポジウムに併せて日本常民文化研究所にある二神家文書の一部が、中島総合文化センターでも里帰り展示されました。



シンポジウムのオープニングは、地元中島中学校生徒有志による「なかじま水軍太鼓」の演奏で始まりました。基調講演は、「忽那家文書を読み解く」の演題で永村眞日本女子大学教授、「近世の二神家文書と二神家」の演題で関口博巨氏神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員がそれぞれ報告を行いました。

そのあと基調講演を受けてのパネルディスカッション「忽那諸島の歴史を探る」では、永村、関口両氏に加えて長井数秋愛媛考古学研究所所長と金本房夫松山市教育委員長の4名がパネリストで登壇。梅木謙一松山市考古館主任学芸員の司会で進められ、予定された3時間40分は瞬く間に過ぎていました。

関口博巨氏が基調講演で報告した「近世の二神家文書と二神家」についての要旨は次の通りです。

## シンポジウムに寄せて

神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員

関口 博巨

周囲わずか10キロほどの二神島。小さいながらもこの島には、弥生時代から中世・近世・近代へといたる長い歴史が幾重にも積み重なっています。

これまで神奈川大学日本常民文化研究所では、二神島に伝わる古文書・古銭・建築・墓地・伝承などを、歴史学・考古学・建築史学・民俗学・人類学等、諸学の方法を総合して調査してまいりました。今回のシンポジウムでは、その成果の一端をご紹介します、新たに浮かび上がってきた二神島と二神家の歴史像をお話しします。

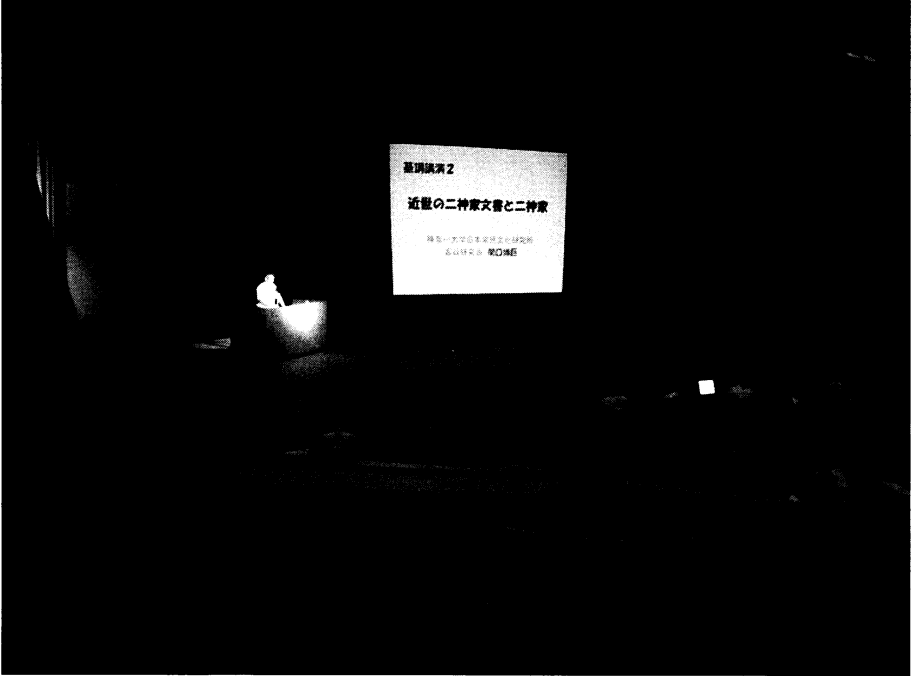
戦国時代の二神一族が、河野氏や来島氏に従った海賊・水軍として活躍したことはよく知られています。では豊臣秀吉の天下一統、徳川家康の開幕の後、海賊の子孫はどうなっていったのでしょうか。二神家は「帰農」したと、しばしば説明されますが、実際はどうだったのでしょうか。二神島に残った二神家のほか北条や大分県など各地に進出した二神一族の江戸時代における動向をたどってみます。

さらにまた、江戸時代の二神島民の暮らしぶり、忽那諸島の中での役割、他領・他国の人々との関係、二神一族のネットワーク、あるいは松山藩との交渉などにも目を向けてみたいと思います。二神島に伝わった確かな史料から再現する海と島が織りなす歴史のドラマをお楽しみください。

# 「近世の二神家文書と二神家」

神奈川大学日本常民文化研究所

客員研究員 関口 博巨



## 1. 歴史が積み重なる二神島

日本常民文化研究所による二神島と二神家の調査 図A  
古文書・建築・墓地・古銭・民俗

## 2. 戦国乱世の終焉

### (1) 二神一族の広がり

元徳2年（1330）6月、二神島住人沙弥法善（吉種）が大願主（安養寺所蔵大般若経奥書）

河野氏や来島村上氏に従い各地に進出。風早二神衆・宅並二神衆のような衆を形成（石野弥栄氏、福川一徳氏）



近世には、本籍地二神島に戻った宗家の二神氏ほか、各地に根付いた諸流が土井二神氏、片山二神氏、常竹二神氏、余戸二神氏、吉木二神氏、小川二神氏、城辺二神氏など独自のイエを確立し、さらに展開（福川氏『海の民ふたがみ』等参照）

(2) 中世の島の暮らし

戦乱の中でも営まれた島の暮らし

浦と泊、居館、安養寺と宇佐八幡宮、妙見社・巖島社、城山（警固所）図B

二神殿・家子衆・名主・百姓・小百姓（海の領主・島の領主としての二神氏）

百姓は年貢・夫銭（二神氏2、今岡氏・村上氏各1）、公事（ほぼ二神氏）を負担する

① 公事「たわらこ（海鼠）」「たき木」「ひじき」「かき」「くず」等—海・山の産物

② 材木の生産

(3) 戦国の終焉・近世のはじまり—二神氏は「帰農」したのか

天正13年（1585）、小早川隆景の伊予侵攻。河野通直は降伏し、安芸竹原に隠遁。同15年7月、通直病死。

『中島町誌』……「二神氏は河野氏の滅亡によって、やがて帰農したものと考えられる」

戸田勝隆の太閤検地によって忽那諸島でも「村切り」→近世の村

忽那諸島の村は「非常に零細な農民によって構成された村」であり、わけでも生産力が「もっとも低位は二神村である」と述べている

“極貧の農村”扱い

しかし、

→ 二神氏のなかには久留島氏に従って豊後森藩士となり、伊予の名族「得能」の名乗りを許された者もいる。

→ 中世の海や山を舞台にした島の暮らしとのギャップ。

→ 文政13年（天保元年、1830）9月「寅歳風早島二神村現船改帳」（二神司朗家文書第1次99）にみる二神村籍の船

- ・永徳丸 9反帆 53石 八端船 活船 長左衛門 橋船付
- ・永君丸 9反帆 55石 八端船 活船 武平 橋船付
- ・6反帆 凡そ20石位 三枚帆 弥右衛門ほか5艘
- ・橋船 太兵衛ほか43艘

以上50艘もの船。近世後期になって増えたとは考え難い。

→ 海賊禁止令、刀狩令、太閤検地以降の二神氏の動向、二神島の暮らしの再検討が必要

### 3. 近世の海と島の物語

#### (1) 島村の庄屋として

- ・由緒書から
  - a 朝鮮出兵 b 戸田検地の案内 c 加藤嘉明に「被扶助」
  - ※ bは古文書で裏付けられる。a・cは未確認で今後の課題。
- ・「二神村」の庄屋として生きる
 

正保年中（1644～48）、八右衛門種忠(3)が、「庄屋役初代」とされる

古文書では寛文2年（1662）6月付覚で「二神村庄や四郎兵衛」=種次(4)が確認される（二神司朗家文書第1次6-1）。同文書で組頭と書かれる勘右衛門は「二神氏末家」とされる家柄（同文書第1次76）
- ・庄屋以外の役職等（種永～種章）
 

新四郎=種永(5)……宗門改役、居村庄屋役、改庄屋役、「御流入」預り、年行事役、豊前国御城米船改方

平九郎=種信(6)……居村庄屋役、改庄屋役、御巡見様御通船御用、大庄屋格（二神新四郎と改称）、大庄屋役

藤次=種章(7)……朝鮮人来朝御用、津和地村庄屋並、居村庄屋役、郡帳面方相見、郡方新地普請所御用、津和地村御用船通船御用掛、郡方御藪床御用掛、畑里村・長師村地坪御用掛、郡役人代勤、津和地村預庄屋、郡役人代、改庄屋、南京人通船の節出精
- ・二神一族の氏寺安養寺は、延宝4年（1676）に松山の真言宗石

手寺の末寺になった。寛文5年（1665）の諸宗寺院法度をテコに本末制度に組み込まれた。二神村の百姓衆にとっては村の檀那寺になったということ。

- ・「海の領主」から行政村二神村の庄屋へ。
- ・“極貧の農村？”二神村の二神家当主と子息が、改庄屋・大庄屋を勤め苗字御免。御用船の馳走（接待）をする御茶屋のある津和地村の預庄屋・御用船通船御用、郡役人代まで勤めている点に注目。
- ・二神村は、二神島のみならず由利島・横島・小市島・中島・鴨背島などの付属無人島を有していたから広い海域を掌握していたことになる。忽那諸島の近世村のなかでも最大の海域支配

## (2) 瀬戸内海交通と御城米船改め

- ・瀬戸内海交通の中継港としての二神村浦。図C～D
- ・図……天正16年（1588）5月、島津義弘は豊臣秀吉に謁するため海路上坂。乗船の面々は「遊ぶ島」（由利島）の「矢たての神」の神威に感じ、「二神の島」に祈る。
- ・図D……御城米は幕府直轄領から江戸や大坂へ送る年貢米のことであり、御城米船はその廻送をになう御用船を指す。二神島は、出羽酒田・豊前―大阪間を就航する御城米船の寄港地であり、二神家は御城米改役を勤めた。

④ 延享2年（1745）4月、豊前国宇佐郡岡田庄太夫代官所の年貢米554俵を大坂に回送をになう御城米船の船頭と上乘が、二神村庄屋新四郎宛にしたための覚書。積載量・水主（乗組員）数制限の遵守を届け出。

⑤ ④の裏側を伝える一札。実は規定の積載量を超過。この先、改めを受けて問題が生じてても、二神村には難儀をかけない旨の誓約。

→ 改役として裁量を発揮。弾力的な対応。

- ・種章(7)が御茶屋のある津和地村浦の預庄屋・御用船通船御用。

→→ 二神村浦と二神家が瀬戸内海交通に占める位地の重要性を物語る。

### (3) 煎海鼠の請負

- ・元禄10年（1697）、長崎会所設立。銅に代わり俵物3品（煎海鼠・干鮑・鱻<sup>ふかひれ</sup>）が対清交易の支払いに充てられる。
- ・寛政12年（1800）～文化12年（1815）の松山藩領では29か村に煎海鼠の御詔高を割り当て。二神村の御詔高は500斤（売上率38.67%）で、和気郡岩城村の1300斤（売上率66.42%）に次いで二番目に高い請負高（菅原憲二氏作成表による）。
- ・海鼠の漁獲は中世以来の伝統だが、近世には長崎貿易の一環に組み込まれた。

### (4) 由利島の鰯網漁と他国の漁民（「油利島」同文書第1次5による）

- ・鰯網一帖が「古来より居り来るル」
- ・年不詳、「元来紀州塩津村之者同島網代曳始候」→「村上之者見習」→「村方ニ網仕出源三郎（種次？）元網ニ而夫より追々村方并外寄合之儀度々有之」

その後、播州福留浦十兵衛網、紀州塩津村勘兵衛、備中国和気郡苅屋村、和気郡岩城村孫右衛門らが入漁。

- ・寛文9年、音戸瀬戸町の加藤太兵衛・大庄屋長師村杉野五右衛門・二神源三郎（種次）が寄合網の「網議定」。
- ・元禄16年（1703）、伊予郡松前浜村庄屋覚右衛門ら、由利島を同村猟場に仰せ付け願い→二神村庄屋新四郎種章は拒絶し、代官谷崎善助らもこれを認める。

※松前浜村は、重信川治水普請と新田開発のため「洲出」して漁場が破壊された。

- ・享保3年（1718）、松前浜村覚右衛門、「押而油利島へ入込」→争論→翌年、二神島側の願い「御聞届相済」。

その後、讃岐国息吹島庄屋網、備中白石島作五右衛門らが入漁  
→→ 鰯網網代は本格的には近世初期・前期に、紀州塩津村の者から「見習」ってスタートした新生業、由利島は、他所出漁者との「寄合網」操業の場、漁場争いの対象に。

### (5) 由利島石の採掘

- ・二神英左衛門種式（慶応3年没）時代の事例……西垣生村沖新

田御普請、三津浜御船場御普請、郡方川筋急難御普請など「郡方御普請入用石」（同文書第2次3、34、39に多数）

- ・大由利は安山岩でできている。→中世から近世初頭の二神島をはじめ忽那諸島の一石五輪塔や家型石廟は安山岩製という報告（大成経凡氏）→忽那諸島の中世石造物も由利島石か？

(6) 材木の伐り出し

- ・⑫ 中世の二神氏が得居通幸へ船の用材100本を調達している。
- ・Ⅱ 未年7月2日、二神村庄屋源三郎（種次（享保10年没か）？）が長野源右衛門にさまざまに加工した木数メ24本を船で積み出している。

→→ 中世以来、材木の伐り出し、製剤、取引を行っていた。

(7) 由利島をめぐる松山藩とのかけひき（「油利島」同文書第1次5ほかによる）

- ・「油利島之儀者、磯山共邑方稼方第一之場所」
- ・元文6年（寛保元、1741）2月、松山藩郡奉行穂坂太郎左衛門は、由利島を10か年間、伊予郡の肥草山にすると「被仰聞」

→ 庄屋新四郎（種章）らは拒否→穂坂ら「由利島之儀、前躰ニ被仰付候」

- ・明和5年（1768）、奉行岡宮九助から「油利島之儀、此度御上莫太之御利益筋有之候ニ付、御上江被召上候（中略）神妙に御請仕候様」仰せ付けられ→「新四郎申候者、此儀何分ニも御請者不申上候」→「御上思召ニ不叶、人痛等茂出来可申由」の内意→新四郎「此度之儀、私壺人ハいか躰之難洪ニ被仰付候而も不苦候、如此申上候上者、命を惜ム心底毛頭無御座候」→大庄屋・改庄屋から説得→新四郎は、「油利島之土地并網代、海辺之儀者此迄之通」「二神村支配」と確認したうえで、下草は伊予郡御田地刈敷に提供し、その補填として米450俵の給付を受けることで決着

(8) 海と由緒が結ぶ一族のネットワーク

- ・明和5年の由利島召上げ一件は、新四郎種章にとって島と海域と家の由緒を探究する契機→由利島関係史料の収集→家・一族

への関心

- ・安永6年(1776)、豊後森久留島藩家臣で二神伝兵衛家の名跡を継ぐ新三郎と国次が家名のルーツを探しに来島。家督の者には「得能」姓が与えられ、それ以外の者は「二神」を名乗っていた(得能新三郎、二神国次)→家・一族の由緒への関心を深める。

- ・種章の歴史学習と史料収集

大友義統書状(第1次1)、河野通直仮名書出(第1次2)、豊臣秀頼書状(第1次3)、「今度於九州有馬私働之事」(第1次4)、「豊後森久留島家系図(第1次72-1)」、「予陽河野盛衰記」の抜き書き(第1次74柳原氏系譜(第1次75)、書籍朱引法歌書付(第1次93-4)、勘右衛門家由来(第1次315)、「予陽河野家譜人」写し(新出4)、「忽那開発記」写し(新出5)など

- ・安永以降、紡ぎ出された系図と由緒

「百合島禄(録)」(第1次71)、「二神氏末家之次第」(第1次77)、豊田二神藤原氏子孫系図略(第1次77)、由利島絵図(第1次85)、藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写(新出1-1~2)、藤原氏豊田二神先祖?中興之霊会日年忌禄(新出1-3)、「二神新四郎由緒親類附」(筆者稿本)など

- ・海と由緒が結ぶ一族のネットワーク

豊後森藩の二神氏、秋山多仲との系譜情報の交換・交流は文通などの形で今後も続く。

柳原二神家所蔵文書を数多く写している。

種章は、饒村豊田家へ豊田二神藤原氏子孫系図略(第1次77)を押し付けようとして返却される。

中世の(衆)から、近世の「家」あるいは一族の結合へ→一族ネットワークは武士・庄屋・百姓などの身分を超える

#### 4. むすびに

○中世の「海の領主」から近世の「島村の庄屋」へ

- ・行政村の庄屋になったが、藩権力に対抗する形で由利島あるい

は海域への「支配」意識は再版された。→種章は、安永4年(1774)の由利明神(矢立明神)の棟札に「二神村莊官」の肩書を記入する。「領主意識」の再版。

○活発な海と山の生業、社会動向との関わり

- ・ 広大な海域の活用
- ・ 社会の動向との関わり  
戦乱の終焉と泰平の時代(村と庄屋、紀州漁民との出会い)  
他地域の治水・開発(松前浜村との遭遇)  
海禁(残りの煎海鼠はどうしたか?清銭?)等々
- ・ 「帰農」という評価への疑問→「兵農分離」「士農工商」の再検討の必要

○海と島と系譜が結ぶ歴史と民俗

- ・ 昔話「お舟にもうし」、「船幽霊」、「エンコの伝説」
- ・ 近世以来の「由利千軒」、由利島沈下の伝説

※ 紙面の都合上、文中にある図A～Dは省略させていただきました。

プロフィール

◆関口博巨(せきぐち ひろお) 1960年生まれ

神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員  
青山学院大学、跡見学園女子大学・東京理科大学ほかで非常勤講師を勤める。

◆略歴

国学院大学日本史専攻  
神奈川大学大学院経済学研究科日本経済史

◆著書

日本近世史「近世初期北陸の悪党社会断章」(『奥能登と時国家』研究編2、平凡社、2001)  
「地方小本寺の由緒と伝説」(『下野山川長林寺乃研究』新人物往来社、2006)

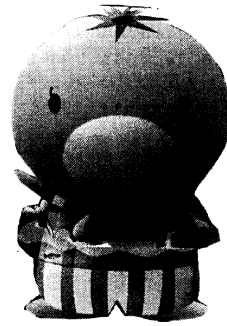
## 「しまはく」(まつやま島博覧会2010) について 二神系譜研究会も協力、参加

「しまはく」は、平成22年4月から10月まで松山市内で行われました。

この「しまはく」は、「松山市の有人離島9島と北条鹿島及び交通の接点のある高浜・三津浜・北条港周辺の振興を図り、島にしかない豊かな自然と美味しい農産物・海産物、また、独特の文化や歴史をより多くの方に知って頂き、この魅力あふれる忽那諸島に来ていただくこと」を目的として開催されました。約半年間の期間中、それぞれの島々では

1. 手作りグルメ・バーベキュー体験
2. 手作りアイテム・レジャー体験
3. ウォーク体験
4. 婚活体験
5. みかん狩り体験
6. オーナー制度
7. ツアー体験、その他

など、100件のイベントが行われました。



### 4月29日、オープニングイベントに出展

4月29日午前10時から午後4時まで、アイテムえひめ(松山市大可賀2-1-28)でオープニングイベントが行われ、約24,000人が参加しました。

二神系譜研究会もオープニングイベントに出展し、

1. 二神島と二神氏のかかわりをはじめ会の活動を紹介するパネル展示、ビデオ紹介
2. 二神島の歴史・文化の紹介
3. 会の活動を紹介する関連チラシ等の配布
4. 会報「海の民ふたがみ」等の販売





## 次は、愛媛県全体の島博覧会を展望

続いて、中村時広松山市長が「オープニングからエンディングまでの半年間皆様の絶大な取り組みで成功させることができました。松山市では今、坂の上の雲のまちづくりを進めています。が、坂の上の雲をつかんだらまた次の坂の上の雲をつかんで前進していきたい。その意味で、将来、県全体の島博覧会をやっていきたい」と述べられました。

### 「活躍の証」を受賞

二神系譜研究会の活動は、「しまはく」に参加した団体の中でも特に注目されました。現代社会で拡大される「無縁社会」の広がりや「系譜」「一門」「門中」を組織することによって、「有縁社会」に転換していく役割を果たし、無縁社会の拡大の防波堤になるのではないかとの期待が「活躍の証」受賞に結びついたものと考えます。



二神系譜研究会受賞の「活躍の証」

## 活躍の証

二神系譜研究会 様

松山島博覧会「しまはく」において皆様が独自の発想と工夫で行った取り組みは島嶼部の活性化に向けた大いなる歩みとなりました

そのご活躍に敬意と感謝の意を表します

今後、島の未来に向けた皆様のますますのご活躍をご期待申し上げます

平成22年10月31日

松山市長 中村時広

## 浩三会長のご冥福を 心からお祈り申し上げます

二神 守

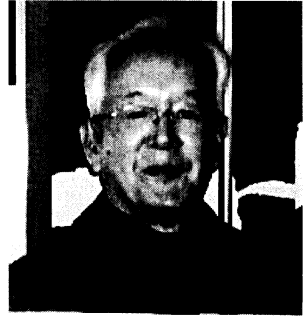
浩三先生をお偲びする前に、私たち兄弟が先生のご厚誼をいただくようになった経緯を少し述べさせていただきます。

私の父（明治25年生まれ）が、松山市の出身であることは、私も小さいころから知っていましたが、松山に身寄り無く、探すすべもないまま過ごしてきました。十数年前、ひよんなことから除籍謄本を入手し、ルーツを尋ねてみようという気になりました。除籍謄本を基に調べたところ、松山市道後湯月町に菩提寺と祖父の小さなお墓を探し当てることができました。平成14年の4月に、初めて兄弟そろってお寺を訪ねてお参りし、住職様から貴重な資料を頂戴いたしました。

その数年前には「二神系譜研究会」が発足しており、その存在をHP（ホームページ）で知った横浜の弟夫婦は、すぐに会員になっていました。翌年、弟夫婦は、松山に浩三会長を訪ね、収集した僅かな資料を提出して、ルーツ探しにご尽力をお願いしました。弟夫婦は、先生のお人柄に惹かれてしまったようです。

先生は、遠くに住む私たちに替わって、資料を手に、町内を1軒1軒尋ねて歩かれたようです。そうしたご尽力の結果、私たちの遠縁にあたる人が、松山市に在住していることが判明したのです。他にも祖父の兄が、明治時代に道後町議会議員として道後温泉の改築に尽力したことの文献も発見され送っていただきました。

その後、弟の発案で「二神浩三会長ご夫妻と遠縁氏ご夫妻を囲む



会」を松山市で開き、先生の労を労うとともに私は初めてお目にかかりました。浩三先生は、弟夫婦が賞賛していたように、私たちもその包容力に魅せられたのは言うまでもありません。学者としての緻密な分析力と、たゆまぬ努力の賜物として、短期間にこれほどの成果を生んだものと感謝しています。その翌年、私も系譜研究会に入会しました。

とはいうものの、私は当初から入会することにはためらいがありました。なぜならば、私たちの二神家は、研究会に属しておられる皆さんのように、先祖代々の由緒ある二神家とは少し違っています。明治初期に、祖父が越智家より分家した際、二神姓を名乗ったいわば新参者であったからです。現在も分家し、二神姓を名乗った経緯は分かっていません。系譜を研究するほどの価値があるのだろうか。

そんな無気力な私の考えを一掃するかのように、浩三先生は私たちが収集した僅かな資料に基づき、粘り強く調査を進めてくださいました。先生の誠意に、私は完全に脱帽しました。私たちが浩三先生に接した期間は、決して長くはありません。しかし、誠実で人を温かく包み込むお人柄は、常に存在感があり、先生が亡くなったのちも決して忘れることができません。

私たちのルーツを探す旅は、ついに分からずじまいに終わったものの、遠縁氏とは目下近い親戚づきあいをさせていただいています。これだけでもご先祖様のお導きと、浩三先生のお蔭と心から感謝しています。

浩三先生ありがとうございました。安らかにお眠りください。

# 浩三先生と私たち

二神照夫・和子

平成12年6月4日、二神系譜研究会関東支部の結成総会が全国町村会館で開催されたが、生憎私は都合が悪くて家内のみが参加した。この事が浩三先生と私たち家族との接点であり、浩三先生に色々とお世話になる始まりでもあった。

その頃私たち兄弟姉妹夫婦は、毎年のように兄弟旅行と称して旅行をしていた。自然発生的に「今度は、祖先のお墓が発見された四国松山方面を旅行しよう」という事になり、平成14年4月に松山市道後温泉の裏手にある円満寺を初めて訪ねた。そこで寺納帳を見せて頂き、二神家に関する関連情報を収集させて頂いた。

私が浩三先生に初めてお会いし、二神家に関する資料をお見せして、調査を依頼したのは、その翌年、平成15年10月20日であった。この日は、旧満洲牡丹江市にあった旧制中学校の同窓会が道後温泉の「ホテル椿館」で開かれることになっていた。浩三先生の発案で私たち夫婦は松山城を見学させていただくことになった。先生とお話を交わしながら、ゆっくりとお城に向かった。話がたまたま江田島のことになり、浩三先生が海軍兵学校出身であることが分かった。私も定年まで海上自衛隊に勤務した事や幹部候補生学校で江田島生活を経験したことをお話しすると、浩三先生はとても懐かしそうな顔をされて、暫くは、江田島の話に花が咲いた。浩三先生は、大きな声で熱弁を振り、青春を回顧するといったタイプではなく、むしろ穏やかに、静かに青春時代を懐かしんでいるような雰囲気を私に与えてくれた。江田島の景色、生徒館や武道館等について、江田島で生活をした者のみ分かる色々な事を語り合った。「弟分ができた、青春時代を語れる後輩ができた」と言わんばかりに、嬉しそうで優しい目をされていた。その後、私と江田島の話をするときは、いつも弟にでも語りかけるような雰囲気を私は感じていた。松山城の天守閣近くの茶店で、お団子をご馳走になったのを思い出す。

平成16年4月には、兄弟姉妹夫婦が揃って再び松山を訪れた夜に、浩三先生ご夫妻と浩三先生が探し当てて下さった親戚筋にあたるO氏夫妻をお招きし、楽しい時間を過ごすことができた。

平成17年11月、関西支部総会が奈良のウエル飛火野荘で、平成18年4月、二神島で総会が行われた時にも私は参加したが、穏やかで元気なお姿が今でも彷彿と湧きでてくる。

海軍兵学校76期の分隊会が毎年夏に伊豆で行われており、浩三先生は毎年のように参加されていたようである。平成19年7月には、分隊会終了後、横浜駅にお迎えにあがり、家内共々会食をした後、羽田空港までお見送りしたことも懐かしい思い出となってしまった。

浩三先生が、どこの海の物とも山の物とも分からない私たち二神家のルーツについて松山の街、二番町や道後温泉裏にある円満寺あたりを歩き回って調査に御尽力をされた事は、私の兄（守）が書いているので省略するが、感謝の気持ちは忘れない。

縁とは不思議なもので、浩三先生の奥さまの妹さんは、私の高校時代（松山ではなく松江高校）の同級生の奥さんであったことも後になって分かった。

今、私の手元には浩三先生が私たちに贈って下さった宝物、『わすれかけの街－松山戦前戦後』（愛媛新聞社）が残っている。「松山市二番町の松尾内科」（親せき筋にあたる）の箇所には、付箋まで付けてあった。暖かい心配りが窺われる。

残念なのは、二神家ルーツ調査に関する浩三先生からの資料が経年変化（特殊なワープロ用紙）で文字が消えてしまい、判読できないものがある。

浩三先生に実際にお会いしたのは、全部合わせても10回もないが、思い出は尽きないほどある。闘病記「切腹」を読ませていただいたことがある。学者らしく、鋭い観察眼には、とても感銘を受けた。

来年4月には、海自幹部候補生学校入校50周年を記念して同期生が江田島に集まる事になっている。その帰途、松山に立ち寄る計画も立てている。浩三先生に最新の江田島事情を報告したいと願っている。

# 坂の上の雲

二神 敏郎

小説「坂の上の雲」のドラマ、立身出世を夢見、松山より東京へ出て大きく替りゆく明治という舞台で活躍する秋山兄弟の物語をTVで見、改めて本を読み返し、懐かしい伊予弁と伊予松山人気質に感激しました。

松山出身の父も大正末期、尋常小学校を卒業後、大阪で丁稚奉公をしながら独立。船場で店を構えましたが、不幸なことに昭和20年の大阪大空襲で全てを焼失してしまい、ころざし途中で松山へ帰りました。2歳だった私は 小学五年生（11歳）まで三津浜小学校へ通い、昭和31年に家族は大阪へ戻ってきました。非常に貧乏な時代で、早く大きくなって家計を助けない、裸一貫で繊維問屋を立ち上げた店が一夜の空襲で無一文になった悔しさと悲しさを いつか僕が父の夢をつぎたいと思った思春期でした。



筆者左

思いはあっても何をしていいものか、全くわかりません。19歳で札幌に来て、23歳でなぜかお好み焼屋を始めてしまいました。わずか3坪の店ながらも、いつか日本一になると心に秘めて44年目。目指す日本一は、店の数でもない、売上げでもない、味でもない、利益でもない、昭和42年創業時の年間売上が40万円位、ひとりひとりのお客様が神様のように思われた時代を忘れずに日々商いをするのが、私の中の心の日本一と言いきかせております。「風月」の経営哲学は、人間大事の経営「お客様大事」「従業員大事」と言い続けられている事が小さな日本一かなと思っております。

松下幸之助さんがおっしゃった「坂の上の雲」を目指そう、の言葉を胸に、それを目標にして 松山人気質を改めて誇りに思い、札幌で頑張っております。

札幌近辺で21店舗のお好み焼屋を営業しております。昔は二神姓が誰も読めなくて「なんとお呼びするのですか？」と聞かれましたが、最近では初対面でも「ふたがみさん」と呼んでいただけるようになりました。

会長のお葬儀には参加できませんでしたが、このように二神系譜研究会が今日迄続くのも、故浩三会長と事務局の皆様のお蔭と感謝します。これからも引っ張って行って下さい。



お好み焼き店 {風月} (札幌市)



## 『縁』に思う

二神千恵子

私は、子どものころより「自分の人生は自分で切り開く」と言った考えのもと行動をしていたきらいがあり、自分の進路について他人へ事前に相談したという風な記憶があまり無い。大概「自分のことは自分で」との思いで物事を決めていたのである。

結婚についても然り。「この人なら食いつばぐれが無いだろう」と考え、また、「アラ！意外と自然が好きなんだ……。」と言った一面が判明したことが最たる理由で夫婦になることを決心したのである。相手は何を以って夫婦になることを決心してくれたのかは、未だ不明だが、私の意を受け入れてくれた結果、私が二神姓を名乗ることとなったのである。夫婦となり37年を数える今日までには、山もあれば谷もあり、しかも嵐になったこともあるが、現在に至るもどうにか一緒に過ごせている。

ところで、我が家が二神系譜研究会へ入会したのは、準備会の時代に『二神さーん！あつまれ〜』と呼びかけた「二神氏の系譜を調査研究する会へのおさそい」の小冊子が郵便で届いたのが切っ掛けである。血筋からして二神氏であろう夫は、神奈川大学日本常民文化研究所が1999年5月30日に開催した第1回二神島交流会記念講演の際に初めて会に一人で参加し、以来、その後の総会には3～4度しか出席しておらず、なまじ、総会への参加は私のほうが多く、皆勤といつてよいくらいである。

私は、歴史が大好きというわけではないし、研究熱心な人間でもないのだが雑学的に「ふ～ん、そうなんだ。」と言った調子に人の話を聞くことは好きである。総会日には、閉会后、何かしらの史跡や二神系譜の関連場所を巡ったり、また、研究者などの講演があったりして、自分の知らないことを知る機会を得られ楽しみな日である。そして、



何よりも嬉しい事は、総会の前日に行われる前夜祭である。泊りがあるときなどは小旅行の気分になれる。参加された人たちのお名前を完全に憶えていないながらも、七夕の如く、1年に1回顔を合わせただけで、その都度、何かしら懐かしさを憶え、『ほっ!』とする。

これは、私と系譜研究会の皆さんとの間で、同じ「二神」という姓を名乗ることから生じた連帯感故の勘定であろうか……。

広辞苑で、『縁』という語を調べてみると

- ① へり、ふち
- ② 家の外側に添えた細長い板敷、縁側
- ③ ゆかり、つづきあい、えにし、関係
- ④ 人と人とのつづきあい、婚姻の関係
- ⑤ 原因をたすけて結果を生じさせる作用、直接的原因に対して間接的条件

と記載されている。

私が自分の決心で二神氏に嫁したということは、④の意の縁と⑤の意の縁が混在し、我が家が系譜研究会に入会したということは③の意の縁で、私が抱く感情は③④⑤の意を含んだ縁なのではないかと思うのである。

ことわざに「袖すりあうも多生の縁」という文言があり、その意は「道の往来で着物の袖が触れ合うような、ごく些細な出来事でも、それは単なる偶然ではなくて前世からの因縁、深い宿縁によるものだ」ということだが、『二神』という系譜のつながりを持つ会員同志は、より深い縁で結ばれているとつくづく思うのである。

何はともあれ、人間関係が一段と希薄になってきている現在、私たち会員間のこの縁は、将来共にずっと大切にしていきたいものである。(2010.11.29)



二神島の港

# 私の二神氏

二神康司（才角二神氏）

20数年前、兄（健司）の高知県才角の墓参りから始まりました。その際、兄は大月町役場に行き過去帳等を調べ、帰宅後、様々なことを私に教えてくれました。兄は、「この先二神氏のルーツを調べたいから二神島に行こう」と誘いました。1年後、2人で二神島に行きました。宇佐八幡神社や二神小学校、二神漁業協同組合前で写真を撮り、パワーを感じました。滞在時間が短く、また誰かを訪ねたわけでもありませんでしたので、ルーツを調べることができませんでしたが、これを機に、私は二神水軍（二神氏）に興味をもちました。



筆者と妻佳子

その後、当時、高知県中村市に住んでいた叔母（千恵子）が、小才角の系図を郵送してくれました。それを見た私は感動し、想像で胸が

いっばいになりました。その頃から、親父（高澄）が少しずつ話し始めてくれましたが、戦争などで良いことばかりではなかったようです。

私の一族は、小才角二神氏の直系である禮蔵の三男（勇次）が、才角に移り「扇屋」という屋号で商いをしていたようです。その頃の祖父（成美）の写真を見て、何ともいえない気持になった事を思い出します。

平成22年3月に我が一族の墓参りに行きましたが、改めて先祖に感謝し、才角二神氏の繁栄を誓いました。今後、知りたいことは、才角と小才角との関係と、やはり小才角二神氏九良衛門より前のことです。どこからの繋がりなのか、どこから来たのか……。



高知県大月町才角にある我が家の墓石

また、Twitter（ツイッター）にて二神系譜研究会を広め、全国の皆さんに興味を持っていただけますよう、微力ながらもつぶやいていきたいと考えております。先祖について解明を続ける二神系譜研究会に感謝し、益々の発展を願っております。

# 平成22年を振り返って

二神美知子

今年1年を振り返ると、いろんなことがありました。4月には山口県豊田町で五年毎に開催される「豊田氏慰霊五年祭」があり、私も参加しました。当日は、前回と違い、風は少しありましたがお天気にも恵まれ、神式により古式ゆかしく、しめやかに行われました。今でもこうして一ノ瀬部落や関係者の方たちはご先祖様（豊田氏）をお祭りし、いつまでも語り伝えていっているのだと……改めて感激しました。5年前もそうでしたが、いつも私たちが温かく迎えていただき、交流会も和やかな雰囲気の中で行われました。



一つ残念なことは、今年の大雪で「館の椿」が被害を受けたことです。5年前は、見事に咲いていた「館の椿」、痛々しい姿ではありましたが。地元の方たちが、ちゃんと補強され、元気になり、見事な花をつけてほしいものです……。

総会は前回と同じ「一ノ瀬温泉グランドホテル」で行われました。

来賓として、神奈川大学日本常民研究所の小熊先生をお迎えし、講演して頂きました。翌日、華山中腹にある神上寺へ行きました。ご住職より神上寺の説明を受け、「聖観音像」や「薬師如来像」等拝観致しました。本堂ではお茶菓子の接待を受け、ご住職より色々お話を伺いました。また、五鈷杵（ごこしょ）を一人ひとり持たせていただき厄除けと願い事をお祈りしました。帰りは2台の車（浩三会長と奥様、俊一副会長と奥様、寿弘さん、）（英臣事務局長と奥様、千恵子さんと私）に分かれ、一路松山へと帰ってきました。

4月29日には、松山市のアイテムえひめで、「しまはく」（まつやま島博覧会）のオープニングイベントが開催されました。4月から10月までの期間、各島でいろんな催しが行われました。この日は二神系譜研究会もコーナーを設け、浩三会長をはじめ会員9人が参加しました。会場にはこの1日で24,000人が来場し、いろんな催し、島の名物、名産の即売会などあり、一日中、来場者が絶えることなく訪れ、賑わいました。二神系譜研究会のコーナーもたくさんの方が訪れ、興味をもって話を聞いていただきました。会場では知り合いの奥様が「手作りジャム」の販売をされておりました。浩三会長も「干物が美味しそうだったから買って来た。」などと楽しんでおられました。

今年、一番悲しかったことは6月18日浩三会長のご逝去です。入院されても必ずお元気な姿でお会いできると信じていたのですが、突然の訃報で驚きました。亡くなられた後で、知ったのですが、私は30年以上も前に浩三会長にお会いしているのです。私の親友のお仲人をされたのです。そう言えば、「お仲人さんと同じ姓だな」と思ったような記憶がありました。後日、友達と一緒に自宅にお伺いし、お焼香させていただき、奥様と友達と3人で思い出話をしました。今思っても、本当に残念でなりません。でもいつも私たちを見守っていてくださるような気がします。心からご冥福をお祈り致します。

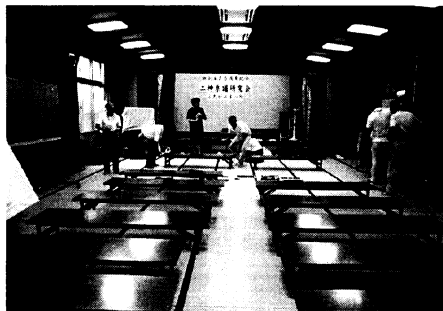
9月4日には、しまはくの一環として「歴史シンポジウム」が中

島で行われ、余戸二神からは、兄信助と、東京の齋藤先生、村上先生が参加されました。

その後、二神島に渡り、神奈川大学の方たちとの交流会を開催し、その日は二神島の集会所で泊まりました。修学旅行を思い出すような雑魚寝です。



翌日5日は「ふたがみまつり」を開催、二神島の方たちも参加され、神奈川大学の日本常民研究所の田上先生と愛媛大学の石野先生が講演されました。そして2班に分かれ、無人島「由利島」へも渡り散策しました。今年は異常に暑かったのですが、「ふたがみまつり」も無事に終わりました。



10月31日「しまはく」エンディングイベントが雨の中でしたが開催され、6か月続いた「しまはく」も終わってみるとアツという間だったような気がします。

最後になりましたが、二神系譜研究会に入会して10年、皆様のおかげで、余戸二神のことが少しずつ分かり、本当に感謝しております。

# 母方の祖、藤原姓溝田氏について

溝田 孝一

1180年（治承4年）平安時代の後期、二神氏の祖、豊田6代輔隆、7代種弘のころ平重衡が東大寺、興福寺を焼くなど南都を焼き払う行為をしたため源頼政（この時代、三位の地位を築き源氏としては破格のあつかいであった。）が挙兵する。全盛を誇る平家に対して反旗を翻した源頼政は力及ばず平等院の羽の芝にて自刃し埋葬される。（76歳、1180年5月26日）さて、この時代の地方ではどのような動きを武士はしていたかは興味あるものです。藤原姓溝田氏の祖である藤原秀郷流小山一族の動きが、国会図書館に保管されていました。



覚書 添付資料 主に藤原秀郷流一族の騎馬人別覚  
写真資料添付

源頼朝、征夷大將軍になる12年前からの記録。

1180年9月3日条 源頼朝、安房国から大庭景親討伐のため小山朝政らの参陣を求める。

父である藤原姓小山政光（この時代、京都御所護衛で留守中）、妻 寒川尼（源頼朝の乳母）は最初に三男朝光を源頼朝挙兵時隅田川の橋辺りの陣に連れて参上。即、頼朝の太刀持ち役を得る。吾妻鏡1180年10月2日条

3兄弟、朝政（24歳）、

宗政（19歳、後に長沼氏の祖）、

朝光（13歳、後に結城氏の祖）は源氏と共に平家打倒へと動く、この源頼政没後、のちに源頼朝が挙兵する前後の小山一族の動きが文書に残っている大変貴重な資料です。

ここで藤原姓溝田氏の祖である鎌倉時代の下野国小山之庄の政光末孫溝田氏初代輝重までの記録を拾うと以下のことが詳細に吾妻鏡上から見える。このことは溝田氏の祖が下野国から播磨国を経て中島までの道のりを辿るということに繋がります。

1182年01月28日条 小山朝政、伊勢大神宮奉納の砂金などを献ずる。

1182年08月14日条 源頼朝誕生三夜の儀は小山朝政がつとめる。

1183年02月20日条 常陸国の志田義弘（源頼朝の叔父）が叛き小山朝政が急



- 襲して敗走させる。頼朝は弟、小山宗政にも援助させる。
- 1183年02月23日条 小山**朝政**、同宗政、野木宮合戦において志田義弘軍を破る。
- 1183年02月28日条 小山宗政ら**朝政**の名代として鎌倉に参上し野木合戦の恩賞にあずかる。
- 1184年01月28日条 小山**朝政**ら、源頼朝のもとに使者をつかわし、木曾義仲討伐を賀する。
- 1184年06月01日条 平頼盛帰路の送別の宴に頼朝の召しによって、小山**朝政**、朝光らが出席する。
- 1184年09月02日条 小山**朝政**、源範頼の軍勢に加わり平家追討のため西海に下向、官途、左右兵衛尉を所望する。
- 1185年01月06日条 源頼朝、範頼よりの兵糧欠乏、士気低下の訴えに対して、書状を送って激励する。その文中に小山の者どもを大切にとある。
- 1185年01月26日条 小山**朝政**ら源範頼軍に従い豊後国に渡る。
- 1185年03月11日条 源頼朝、小山**朝政**、宗政らにねんごろな書状をつかわす。
- 1185年04月15日条 源頼朝、京都で頼朝の推薦なく任官した御家人らに帰国禁止を命ずる。
- 1187年08月15日条 鶴岡八幡宮放生会の流鏝馬に小山**千法師丸**（後の**朝長**、**朝政**の嫡子）が射手に選ばれる。**吾妻鏡**に初めて登場。
- 1187年12月01日条 源頼朝、小山**政光**妻に寒川郡並びに網戸郷地頭職を与える。
- 1188年07月10日条 源頼朝の嫡子萬寿（頼家）の甲着始の儀で小山**朝政**御甲直垂青地錦を持参する。
- 1189年06月27日条 源頼朝、奥州征伐を決め、武蔵、下野両国の御家人は行軍の先々で参会せよと命ずる。
- 1189年07月08日条 源頼朝の命によって新調の御旗の絹は先祖藤原秀郷にあやかって、小山**朝政**が献上する。
- 1189年07月19日条 小山三兄弟ら、源頼朝に従い、藤原秀衡征伐に発進する。
- 1189年07月25日条 小山**政光**、源頼朝が滞在する宇都宮の宿館に参上して駄しょうを献ずる。（**朝政**父初めて**吾妻鏡**に登場する。）
- 1189年08月14日条 小山武士団ら物見の岡を攻める。
- 1189年09月06日条 小山朝光、藤原泰衡の首級を持参した河田次郎（泰衡の下人）を預かる。
- 1189年09月20日条 小山**政光**入道の郎党、源頼朝から勲功の賞を賜る。
- 1190年06月14日条 源頼朝、鎌倉の小山**朝政**の邸宅に赴き一泊する。

- 1190年11月07日条 源頼朝の入洛に際し、小山**朝政**ら従う。
- 1190年11月28日条 源頼朝、右大将拝賀隋兵につき、北条義時が甲および直垂の色について小山**朝政**に告げ示す。
- 1190年12月04日条 源頼朝、権大納言、右近衛大将を拝辞、この辞意について後鳥羽法皇は苦笑。(鎌倉武家事典)
- 1190年12月11日条 それならば頼朝の功臣10人を扨んで左右兵衛尉、左右衛門尉を任命した。この10人の中に小山**朝政**、冠位には藤原**朝政**となっている。
- 1191年01月03日条 小山**朝政**、浣飯を献ずる。下河辺兄弟が協力する。
- 1191年08月18日条 小山三兄弟ら、新造の御厩に馬を献ずる。
- 1192年07月12日条 源頼朝(44歳)に征夷大將軍の宣下がある。(鎌倉武家事典)
- 1192年08月15日条 小山**朝政**、若君千万(源実朝)の七夜の祝儀を行う。
- 1192年09月12日条 小山**朝政**、常陸国村田下庄、下妻宮等地頭職として政所下文を受ける。  
源頼朝、小山**朝政**を下野国日向野郷地頭職に補任する。政所下文に副えて、源頼朝袖判の下文を賜る。(現在この2枚の下文(原本)は横浜近代博物館が保管しております。)
- 1192年12月05日条 源頼朝、浜御所に御家人たちを召し、誕生の子(実朝)の将来を託する。
- 1193年04月02日条 那須の巻狩に、小山**朝政**らがおのおの千人の勢子を献ずる。
- 1193年05月08日条 富士の夏狩に小山三兄弟らが供奉する。
- 1193年08月16日条 小山**朝長**(朝政の嫡子)、流鏝馬の射手に選ばれる。
- 1194年10月09日条 源頼朝、小山**朝政**亭に赴き、弓馬の達人を集めて流鏝馬などの射方を討議させる。
- 1194年10月 ? 源頼朝、征夷大將軍を辞する。  
翌年再度上洛の折、長女、大姫入内を計画、次の何かを要望するための政治工作だという説(鎌倉武家辞典)
- 1195年05月15日条 三浦介義澄と足利長氏とが、郎党の争いから乱闘をおこす。  
小山**朝政**らは足利宿所に参集する。
- 1195年08月16日条 小山**朝長**、鶴岡八幡宮の馬場の儀に流鏝馬の射手として登場。
- 1197年07月14日条 源頼朝長女大姫病死20歳、頼朝の入内計画も遺えた。(鎌

倉武家事典)

- 1199年01月13日条 源頼朝没、源頼家（18歳）継ぐ。（鎌倉武家事典）
- 1199年10月28日条 主なる御家人66名が梶原景時弾劾の連署状を作って幕府に提出。  
小山**朝政**、結城朝光加わるが長沼宗政は姓名を載せるのみで判形を加えず。
- 1199年12月29日条 小山左衛門尉**朝政**、播磨国の守護職に補任される。  
梶原景時追放、播磨を小山**朝政**に替えた。
- 1200年01月25日条 小山**朝政**、播磨国五箇庄の地頭職を与えられる。源頼家袖判下文、松平基則氏所蔵品を横浜近代博物館にて保管。
- 1200年02月06日条 長沼宗政、梶原景時弾劾に不参加の故に、御家人詰め所で小山**朝政**から激しく非難される。
- 1201年02月03日条 城四郎長茂、小山**朝政**の京都三条東洞院宿所を襲う。  
この乱を京都側で見た記録としては九条兼實の玉葉が詳しい。
- 1201年03月11日条 小山**朝政**が播磨国一方庁直職などをめぐる相論に下知を加えた事が見える。（関東下知状写し、壬生文書、広峯神社文書）
- 1201年04月02日条 越後の城資盛の反乱。（鎌倉武家事典）
- 1201年05月14日条 城資盛敗死、この合戦で資盛の叔母、板額を生け捕り鎌倉に護送してきた。小山**朝政**以下重臣が待所に列座しているのに悠然として男優りの態度を示した。その後、甲斐の阿佐利与一義遠という家人が板額を賜りたいと申し出た。勇壯の吾が子を設けたいと切望したので源頼家はその願いを許す。（鎌倉武家事典）
- 1202年07月22日条 二代目源頼家、従二位、征夷大將軍に任じられる。（鎌倉武家事典）
- 1203年09月02日条 小山**朝政**、長沼宗政、結城朝光3兄弟らが北条氏討滅を策した比企氏を攻め滅ぼす。
- 1203年09月07日条 將軍頼家の病中廢位の事が運ばれ、この日、三代目源千幡（實朝）6歳は従5位、征夷大將軍の宣下を請ける。  
（鎌倉武家事典）
- 1203年11月15日条 鎌倉中の寺社奉公のことを定め、小山**朝政**、勝長寿院を担当する。
- 1204年05月19日条 幕府政所、故源頼朝発給の文書を、その発給の趣旨を知るため小山**朝政**ら御家人から提出させ写しをとる。

- 1204年07月18日条 伊豆修善寺幽居中の二代源頼家殺される。(鎌倉武家事典)
- 1205年06月22日条 小山**朝政**、北条義時に味方し、畠山重忠滅ぼす。
- 1205年08月07日条 宇都宮頼綱、反心疑われる。幕府は小山**朝政**に討たせようとした。  
**朝政**は頼綱とは姻戚の間でその反逆には与せず数日後、**朝政**の勧告を請けて頼綱は出家した。宇都宮氏は鎌倉幕府の重臣の一人であった。
- 1209年12月15日条 北条義時、守護らから補任の下文などを提出させる。小山**朝政**、藤原**秀郷**以来相伝の由を上申する。
- 1218年12月26日条 小山**朝政**、結城朝光ら、服忌によって將軍実朝の右大臣拝賀の隋兵から外される。兄弟共通の喪として父**政光**が考えられる。
- 1219年01月27日条 積雪、三代將軍實朝(28歳)右大臣拝賀のため鶴岡八幡宮挙式の夜、八幡宮別当、公暁(頼家遺子)に討たれる。公暁は長尾定景に討たれる。(鎌倉武家事典)
- 1220年04月 ? 二代將軍頼家の遺子禅暁、京都にて殺害される。(鎌倉武家事典)
- 1221年05月23日条 承久の乱における鎌倉軍の京都進攻に際し、小山**朝政**ら宿老は鎌倉に留まる。
- 1221年05月25日条 承久の乱、鎌倉幕府、西上の幕軍の大將は次の様に定めた。  
 東海道を北條時房、泰時ほか 兵10万余騎  
 東山道を小山**朝長**、結城朝光、武田信光、ほか 兵5万余騎  
 北陸道を結城朝広、ほか 兵4万余騎
- 1221年06月05日条 東軍、官軍と合戦、小山**朝長**などが大井戸を渡り官軍と合戦、官軍大將逃亡。
- 1221年06月24日条 後鳥羽上皇、合戦の張本として公卿4人を六波羅にわたす。小山**朝長**は中御門宗行を預かる。  
 北條義時、乱後の処置を京都在中の北條泰時、時房に指令す。
- 1221年07月10日条 小山**朝長**、中御門宗行を護送して鎌倉に下る。
- 1222年02月06日条 御所の南庭の犬追物で小山**朝長**らが射芸の妙をあらわす。
- 1223年10月25日条 幕府は播磨国守護小山**朝政**に命じ、広峯社山上坂本に守護代の乱入を停止させる。(広峯神社文書 関東下知状)

- 1224年07月01日条 執権北條義時未亡人伊賀の方の陰謀により、尼將軍政子が小山**朝政**らを召し集める。
- 1225年07月11日条 源頼朝妻、政子没、69歳（鎌倉武家事典）
- 1228年02月04日条 小山**政光**妻、寒川尼没、91歳
- 1228年03月25日条 4代將軍、九條頼経、12歳、小山**朝政**の宿所小山亭に入御。
- 1228年05月10日条 小山長村（**朝長**の嫡子）將軍家御所内で流鏑馬射手として初めて吾妻鏡に登場。年12歳。
- 1228年10月15日条 將軍藤原頼経、方違のため鎌倉車大路の小山**朝政**亭を訪問する。（現在この地は、鎌倉女子高校付近に該当。）
- 1229年11月17日条 **小山朝長（朝政の嫡子）没、42歳**
- 1230年01月23日条 將軍頼経、由比ガ浦に笠がけ等を観る。小山五郎長村など参加。
- 1230年02月20日条 小山**朝政**、所領、所職を嫡孫長村に譲る。（小山文書、小山**朝政**譲状、小山博物館にて保管している。）
- 1233年05月27日条 小山**朝政**、3月7日の那須野、卷狩の折、大鹿を射取る。
- 1234年03月29日条 小山**朝政**出家する。法名**生西**
- 1235年06月29日条 **小山、薬師寺朝村（小山朝長の子）**將軍家新造御堂の安鎮を行う折、御剣を役す。**初めて吾妻鏡に登場。**
- 1236年04月04日条 將軍藤原頼経、方違のため小山**朝政**亭に入る。
- 1238年03月30日条 **小山下野守朝政没、84歳**  
**小山下野守従五位下藤原朝臣朝政法師 法名生西**
- 1238年12月 ? 播磨国守護小山氏の守護代真弓次郎入道願西、広峯社の山上坂本への守護使入部について弁明し、以後の守護使の入部を停止する。（広峯神社文書 播磨国守護代真弓願西解状）
- 1240年11月19日状 前淡路守従五位下 小山**朝政**の兄弟、長沼（小山）宗政没、79歳  
長沼前淡路守従五位下藤原朝臣宗政法師
- 1241年11月29日状 三浦、小山一族、若宮大路にて争闘。  
三浦一族が下の下馬橋付近の家に集まっていた時、小山、結城一族の中の朝村（結城十郎朝村）が由比ガ浜の遠笠懸（射技）に向う途中、野犬に射掛けた矢が誤って、三浦一族の集うところに飛んだというのが原因で争いになった。  
三浦家村、結城朝村が出仕を止められ、三浦泰村と結城

- 朝広、小山長村が北條泰時から戒告を受けて事は落着。  
 1243年07月17日条 小山長村等、将軍家他出の際の御供に結審される。  
 1244年08月15日条 **小山、薬師寺政氏（薬師寺朝村の嫡子）、鶴岡八幡宮の放生会で、将軍頼経の供奉人として御後の行列に参列。初めて吾妻鏡に登場。**
- 1247年06月05日条 小山長村らが琵琶の伝統を受け継ぐ。（東山文庫、琵琶相承之系図）  
 1247年06月20日条 小山長村が三浦胤村を囚人として召し進ずる。  
 1247年12月29日条 京都大番勤仕役が結審され、小山長村、結城朝広らが加えられる。
- 1250年02月26日条 鎌倉幕府将軍、九條頼嗣の弓馬の指南役に、小山長村などが召されるように北條時頼執権が推挙した。  
 1250年03年28日条 小山長村、堂供養を営む。**生西**13回忌。  
 1250年12月27日条 近習の結審を定める。小山長村、結城朝村などの名がある。
- 1250年12月28日条 小山長村、下野国大介職に復する。  
 1252年04月24日条 将軍家の蹴鞠に小山長村らが参加する。  
 1254年02月24日条 小山**朝政**兄弟の末子、結城朝光、従五位下、上野介没、87歳  
 前上野介従五位下藤原朝臣朝光法師 法名日阿
- 1256年03月04日条 播磨国守護小山氏の守護代某、一切経を鎌倉に輸送する役の一部負担を広峯氏に命ずる。（広峯胤忠氏所蔵文書播磨国守護代某催促状）
- 1256年06月02日条 奥州街道に夜討、強盗が横行するので街道沿いの地頭小山長村、薬師寺阿波前司**朝村**ら24人に警固を命ずる。  
 1258年04月25日条 北條時頼の子、北條時利、年11歳（後に時輔）に小山長村の娘を嫁がす。
- 1260年01月20日条 芸能の輩を選び、御所の昼番衆を定める。小山長村、結城広綱、同朝村、長沼宗秦らあり。  
 1260年11月22日条 将軍家宗尊王夫人が小山長村亭に入る。  
 1263年01月10日条 小山長村が、旬の蹴鞠の奉行に選ばれる。  
 1263年08月09日条 阿波入道（**薬師寺政氏**）子息、将軍家御上洛の隋兵として**初めて吾妻鏡に登場。**
- 1264年11月09日条 北條時輔（時宗の異母兄）、妻小山長村の娘、南六波羅探題として赴任する。（鎌倉武家事典）  
 1269年08月15日条 小山長村、死去する。53歳（続群書類従本 小山系図）

- 長村四郎、小山出羽判官 文永六年八月十五日卒、五参歳
- 1282年11月25日条 小山宗長が播磨国守護に在職したことが海老名文書 関東下知状案に視える。
- 1331年08月 ? 後醍醐天皇の呼びかけに応じて河内国に挙兵した楠木正茂討伐のため幕府軍が上洛する。その中に小山、長沼、結城氏らが居る。(光明寺残篇)
- 1333年05月22日条 新田義貞、鎌倉を攻略し、北條高時自刃す。北條氏滅ぶ。(鎌倉武家事典)

### 小山氏の守護職の歴史

小山政光	下野国大丞	
小山朝政	下野国守護職	譲受後終生
	播磨国守護職	1199年から1230年
小山朝長	就任せず早死	42歳
小山長村	下野国守護職	譲受後終生
	播磨国守護職	1230年から不明
小山宗長	下野国守護職	譲受後終生
	播磨国守護職	建治ごろから1276年
薬師寺朝村	阿波守	1240年頃から
(小山朝長の子)		
薬師寺政氏	阿波守	1244年頃から
薬師寺政盛	阿波守	1263年頃から

- 1333年 5月23日 北條高時、東勝寺で自決、一族283人を含む870余人自害、市街戦のため幕府関係史料、吾妻鏡編纂史料など灰に帰したため、1265年から1333年までの鎌倉幕府記録が1265年で終わっている。

### 参考文献

- 吾妻鏡 貴志正造訳 (株)新人物往来社
- 鎌倉武家事典 出雲隆篇 (有)青蛙房
- 国史大系 吾妻鏡 第1から第4 吉川弘文館 黒板勝美編
- 小山市史 史料編 中世、通史編1 小山市史編纂委員会

## 「ありがとう」美しい言の葉 老若男女 皆 それぞれのひびき

二神チヨリ

優しい癒しの言葉。何時も何処かで聞く言葉。その度、心にしみる。主人の残した細やかな足跡、振り返ればその折々に関わって下さった方々、永い間御支援いただき支えて下さった皆様に深く感謝致します。

「ありがとう」ございました。

主人は「幸せ一杯」の人生を送らせていただきました。かえりみますと二神系譜研究会に入会させていただき、今まで歩いて来た分野とは無関係「百八十度」の転換でした。でも、歴史を紐解く面白さに張り切って居りました。人生の最後、意義深い毎日を送れた事に喜びを感じて居りました。入院中、「跡を継いで下さる皆様が居られるので二神会も大丈夫」と安堵した言葉を残して居りました。「バトンタッチ」を考えて居た矢先の出来事となりました。「幸せな人生」を歩んだ人だと思つづく思います。

幸せのお裾分けをください



「最後のお花見」平成22年春、  
家の近くの石手川沿いにて  
浩三、チヨリ



た私、最後の別れの言葉は「サヨナラ」ではありません。「ありがとう」と、只それだけで送りました。

黄泉の国に旅立った主人に、今頃は届いて居るでしょうか。何時までもこの美しい優しい感謝の言葉『ありがとう』を胸に秘め、大切にしていきたいと思います。



左から二神チヨリさん、二神栄三さん、二神浩三さん、  
二神敬次さん、二神泰次郎さん、二神和子さん  
(平成14年4月28日) 北条片山墓地

写真提供：二神俊一

# 父と二神系譜研究会

二神 敬次

このたび、亡き父の思い出ということで、投稿させていただくことになりました。まずは、この誌面をお借りしまして、父の存命中、二神系譜研究会の皆様から頂戴致しました、数々のご厚情に対しまして、深く感謝申し上げます。

思い返しますと、定年を迎えた父に、第2の人生における生きがい、やりがいを与えていただいたのが、この会との出会いでした。それまでは技術系の本ばかり（間に釣りの本もありましたが）並んでいた書棚に、瀬戸内の水軍の歴史等、趣の異なった本が増えていきました。生涯、何かのテーマについて、研究していくというスタイルを全うでき大変幸せな晩年を過ごさせていただいたと思います。

遡っていきますと、釣りの大好きだった父が、釣り場として松山の沖合いに浮かぶ同じ名前の「二神島」という島に興味をもったのが最初であったかと思えます。私も何度か同行しましたが、夜釣りで見た、満天の天の川の迫力は忘れられません。それから、島で出会った人々の温もり。同じ名を持つ島ということで、一層、感慨深いものでした。そうして、釣り場だった島は、遠い先祖のふるさとに置き換わっていたのでした。

父の探訪の旅は残念ながら終わってしまいましたが、二神系譜研究会の探訪の旅はまだまだ果てを知りません。これからの会の益々の隆盛を祈念致しましてペンを置かせていただこうと思います。

重ね重ね、本当にありがとうございました。

# 父を偲んで

井口 真理

父が亡くなってから“さびしい”という言葉は、こういう時に使うものだとしみじみ感じています。

父は厳しい人でした。でも、とても優しい人でもありました。反抗ばかりしてきて、親孝行も何一つできず、「ありがとう。」の言葉さえ素直に言えないままになってしまいました。

父は、花火を見るのが好きでした。結局一度も来てはもらえなかった浜北の家の2階からは、夏になるとあらゆる所で上がる花火がとてもよく見えます。父の写真を窓際に置き、一緒に花火を見ながら「さびしいよ、お父さん。」と思わずつぶやきました。

最後になりましたが、父の晩年の日々を充実したものにして下さった二神会の皆様に心から感謝しております。本当に有り難うございました。



「わたしたちのお父さん」  
左から、敬次、浩三、真理

## 大人浩三会長を偲んで

理事 二神 久藏

初めに私事で済みません、今年三月事故に遭い右膝の半月盤と内側靭帯、前十字筋靭帯を損傷、3週間股関節から指先までギブスで固め落ち着かせて、7月1日内視鏡手術、7月22日膀胱内視鏡手術、11月4日膝内視鏡再手術、退院11月15日と入退院を繰り返しの事態で、山口県豊田町での総会にも、浩三会長の葬儀にも参列致せず、心に引っ掛かる日々を過ごし自己の体力、気力の衰えを認めざる得ない毎日です。



「我、老いたり」です。パソコンのメールも百拾数通頂き、確認の毎日です。

本日11月17日病院の外来から帰りますと、涉、様から封書が届いていました。浩三会長の追悼文等のご依頼でした。僭越にも追悼文は書けませんが、お世話に成りました思い出を書かせて頂く事位しか出来ません。

浩三会長に初めてお会い致したのは平成15年頃、松山市内のホテルの前夜祭だったかと存じます。家内と2人して私の故郷（旧城辺町）に在る祖父以前の墓参りを済まし、少し時間が取れたので、家内には初めてなので佐田岬の天辺までドライブを致し、前夜祭のホテルへ駆け付けたのは、30分以上経過致していました。後でお聴きすると失礼な遅刻者に対して、初めてのご参加者なので待ちましょと大分開催時間を延ばして下さいと伺いました。その時浩三会長がわざわざ手前共の席へお見えになり、ニコニコと笑顔で「ご遠方より、、、」とお声を掛けてくださり、赤面の至りでした。

その後、平成18年度の総会が二神島で開催された時、北海道の敏郎さん、大阪の宏介さんご兄弟が釣り船をチャーターされ、釣り遊船しながら会場の二神島へ向かうから、是非乗船する様お勧め頂きました。

小雨の中、釣り針を「あっち、こっち」と引っ掛け、釣った魚も外せず、案内の為乗船されていた涉さん、北海道の敏郎さんの娘さんに取り外して頂く醜態でした。宏介さんから最初お誘いを受けた時、私は釣りが出来ないのでお断りしたのですが、浩三会長から楽しいから、面白いですよ、初めてでも、釣れる場所に御案内しますから、是非乗る様何度もお手紙を頂きました。

後でお聴き致すと、会長ご自身が太公望との事でした。おそらく浩三会長、涉さんが、北海道よりの敏郎さん、その娘さんの為に船頭さんに、普通は案内しない場所を特別に頼まれたのだと思います。涉さんには雨の中、ずぶ濡れに成りながらの御面倒を掛け、皆様方には申し訳なき次第でした。おかげ様で便乗者の初めての、私でもじゃんじゃん釣れ、面白く十分楽しませて頂きました。後で宏介さんから久藏さんの釣りは殿様の釣りや、と少し怒られました。それ程皆様にご迷惑を掛けた次第です。私に取ってはこんな楽しい思い出を創ってくださったのも会長のお勧めが有ったからです。

城辺出身の駿吉が、私の本家筋で日本油脂、宇部興産等に関係して居ましたので、正確に知りたい事か有り、日本油脂に付いては従兄がOBで近くに居たので、調べは付きました。宇部興産関係では、浩三会長と私の見解が少し違っていましたら、「私の教え子が宇部興産の役職に就いている、調べましょう」と、早々に社史のコピーを送付頂き私の思い違いを正して頂きました。関西支部会にもご協力頂き、何時でもニコニコ、飄々としてお越し頂きました。

はっきりとは覚えてはのですが、昭和30年代だったか、在る全国紙に獅子文六が「バナナ」と言う題名で連載された作品が有ります。

主人公が、その父親として、在日華僑の会長として「天童」と言う人物が描かれて居りますが、浩三会長と「天童」との年恰好、性格が、よく似通って居る様に思はれて成りません。何時もニコニコ、飄々とユーモアを称えて居るのですが、いざと言う時には、物事をきちんと

理解して、指示を出し、周りの者がぐら付いても、浮付いてもじっと見つめ方向を示す、大人のような人物です。

浩三会長は大学の先生でその後、叙勲もされ、其れも理系がご専門なので、気難しく怖い、取っ付き難い方と初めは思っていました、長年お世話に成りましたが、一度もそんなイメージが無く、大学ではどんな講義を去れていたのかとか、私も一度講義を受けて見たかった想いです。まさに大人浩三会長、今の中国では失われた言葉、大人浩三会長の思い出です。

私も気弱に成らずに、この大人浩三会長に先導され、「未だ、老いては居ない」と気持ちを切り替え、前進せねばと思う様に致さなければと存じます。

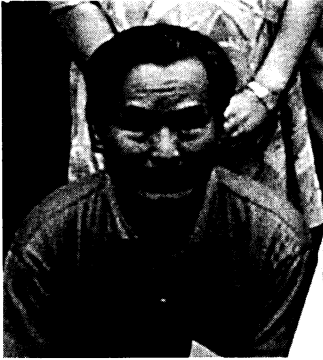
偲びて合掌（平成22年11月21日）



松山国際ホテルにて 平成12年 3月11日

# 今日、思うこと

理事 二神 亮郎



今日（11月18日）は、父「栄」の命日、40回忌でございます。60数年昔、自分のルーツを解き明かさんと一生懸命、努力をしていた姿は、いまだ、私の脳裏から離れません。国が破れ、貧乏で、その日の生活にも事欠く時代でしたが、まだ若い情熱と志だけは持っていたのでしょ。

「汝、何のために、そこにありや」の心情で、自分を見つめる時間を作るため、自分の歴史、即ち、先祖調べに挑戦したのではないのでしょうか。親戚はじめ、大勢において、変人扱いを受け、物好きなことをするものだと、嘲る風潮の中、本人は、数学の解析を解くように真剣にやっておりました。数少ない父の友人たちは、「栄さんの言うことやることは、何事も10年くらいしないと、部落の人たちには分からないよ」と、よく話してましたことをよく覚えています。

子ども心に返って父を思い出しますと、いつも赤い顔、相手と暇さえあれば以後・将棋、海が好きで、正義が好きで、すぐケンカ、政治が好きで、タバコが好きで怒るとスターリン、笑うと笠智衆に似ていました。土佐のいごっそう（絵に描いたようなコワイ、怖い頑固者でした）

ある日、「晩酌の適量はどのくらい？」と聞いたら、「一升やネエ」、納得いく量は、どのくらい？」「二升ぐらいは……いけるネエ」と笑顔が返ってきた。これくらいの大酒のみでした。タバコ・酒を飲みすぎて身体を壊し、何度手術をしたことか。何事も徹底的にすることが性分で、生涯、酒とタバコで苦労したようです。態度には表さなかったけど、子煩悩でした。

今日の、二神系譜研究会のご成果を聞けば、どんなに喜んだことで





# 頭の痛い墓問題

理事 二神 康郎

今年の夏も二女の一家と松山に帰って墓参りをした。墓地は市営で伊予鉄道梅津寺駅から約徒歩10分、坂を登った高浜中学校のそばの小高い丘にある。「坂の上の雲」で有名な秋山兄弟の銅像にも近い。興居島の泊地区にある菩提寺とは海を隔てている。

墓石は四基並んでいる。左端が二神茂七の墓、二番目も二神茂七の墓、三番目が二神家分家の墓、四番目が二神家の墓だ。小生は一世茂七から数えて5代目に当たる。

左端の最も立派な墓石の主を我々は一世茂七と呼び、二番目の墓の主は同じく二世茂七だ。三番目の墓には二世茂七の長男鶴吉とその係累が、四番目の墓には二世茂七の二男愛次郎とその子孫が眠っている。長男が放蕩息子で真面目な二男が跡を継いだらしい。

港山二神氏には系図が残っている。二神島在住の故二神司郎氏の叔父にあたる二神仲次郎（種美）氏が、二神本家の系図を達筆で書き写し二世茂七に与えたものだ。これを見ると神代からの我々のルーツがよくわかる。

一世茂七は今から約150年前、系譜研究会の豊田渉常任理事の先祖に当たる豊田家から分家して二神性を名乗り、二神島を出て松山市の商港三津浜の対岸に位置する港山に住み着いた。そのため二神系譜研究会では我々を港山二神氏と呼んでもらっている。系類にはどういうわけか女が多く結婚して別姓となるほか養子に出る男も少なくなく、現在港山二神氏に属する二神家は残念ながら三家族しか残っていない。

その内の一家族が小生と同居している三女一家だ。小生の子供は三人とも女で当家の断絶を覚悟していたが、三女はどうした訳か長男である男性と結婚し、相手に二神性を名乗らせてしまった。その夫婦に今年の5月男の子が生まれ、現在7カ月まで成長した。我々夫婦にとっては初めての内孫。しかも、男の子なので我々はその子を“あととり”と呼んで可愛がっている。

家内は病弱のせい自分の墓を確保したいと言い出し探した末に、今年の9月都営小平霊園近くの霊苑に1.5㎡の墓地を買い求めた。本来なら我々は松山の墓場に入るところだが、長年東京に住み着き、子供、孫達共全員東京で生まれ育ち、松山との縁も薄くなっている。墓場の世話をしてくれている松山の親籍も高齢のため、近い将来手を引かれる公算が高い。その際、松山の墓をどうするかは頭の痛い問題だ。

松山に帰ったのを機会に、孫達の希望に添って、開催中の「まつやま島博覧会」のイベントに参加し、遊魚船をチャーターして魚釣りを楽しんだ。二神島に宿泊したいと思ったが、民宿は二軒共に経営者が高齢でおもてなしできないと断られ、初めて対岸の怒和島の民宿に泊まった。

釣果は上々で、めばる・つばくろ・あぶらめ・べらなど主体に四人で2時間で150匹ばかり釣上げた。プロの漁船が近づいてきて、「鯛はいらんかな」と問われ1000円渡したら25センチほどの鯛一匹と30センチほどのあじ6匹、それに30センチほどのうまづらはぎをタモで掬い、こちらの生けすに放り込んでくれた。上怒和港で魚を発泡スチロールの箱に入れて氷を詰め、一箱は宅急便で東京に送り、一箱は松山の親戚に進呈したら大変喜ばれた。



松山市怒和島・元怒和港にて

# 忽那諸島の旅

理事 二神 元信



私は旅行が好きだ。旅行といっても、グルメ目的や名所を巡る所謂観光旅行にはあまり興味はない。気の向くまま知らない所を廻ってみたい、出来れば諸国漫遊がしてみたいと若いときからずっと思っている。日にちのやりくりも結構自由に出来る身になっている今、島博の会期に設定されている系譜研究会（ふたがみ祭り）参加は、好機到来だ。この機会に忽那の島々を廻ってみようと胸を膨らませていた。しかし、旅立ちが近づくにつれ色々都合が生じ、やはり限られた日数になってしまった。忽那諸島の旅と云うには大げさだが、今回は中島（シンポジウム開催地）、二神島、由利島それに津和地島の4島を訪れるだけになってしまい、興居島、釣島、怒和島、睦月島、野忽那島等は後の楽しみに取っておく形になってしまった。それでも都合二泊三日の旅で、いずれの島も半日～1日の滞在でかけ足となったが、十分満足できる中身の濃い旅であった。

一体、忽那の島々、或い



由利島の港内（元は、池だったところ）

は瀬戸内の島々には謂われを知らない他郷の者にとっては、謎めいた魅力的な、時には恐ろしげな名が付いた島が多い。二神島然り、津和地島然り、隣の怒和島然りだ。この津和地島は何とも発音しにくい憶えにくい名だが何か人を引きつける地名である。旅行をする際、あらかじめその地方のことを調べて訪れるのも良いが、全く予備知識を持たずに訪れるのもまた楽しい。私の場合はなまけ者の性格と相まって後者だ。ともかく白紙状態で島に渡り、自分で何かを見つけ、この島は何であるかを想像し、謎を解き、この土地の将来を占うのは魅力的だ。

今回、無人島の由利島行きへは、二神博典さんの船に乗せていただいた。研究会が企画してくれたこの機会を外すと、生涯行けなかったかもしれないだけにありがたかった。島には小一時間上陸し、あちこち歩き回った。由利島は大由利と小由利およびそれらをつなぐ砂州から出来ている。無人島のせいか、海面すれすれの心細げな砂州に立ち波の音を聞いていると知らず望郷の念が湧いてくる、そんな島だ。海面上昇で国土が細ってくる南洋の島々の人々の気持ちはさぞ心細かろうと想像する。

9月4日中島でのシンポを終え、5日二神島からの由利島探訪、同島での研究会の後、相談に乗ってくれた豊田渉さん推奨の津和地島に渡り、同じく紹介して頂いた亀川旅館に泊まることにした。津和地島へは研究会の後夕方広島へ帰るといふ博典さんの船に再び便乗させてもらった。

津和地島であるが、島博のパンフレットには旗山が印され眺望が良いと紹介されているので是非登って見たかったが、宿の人や土地の人の話では、「人が行かないので道は草むし、通行止めですよ」とのこと。あきらめて、翌日旅館で貸してくれた自転車で農道を登れる所まで登り、且つ猛暑の中、島を一周した。山腹からの眺めもすばらしく、島の南側の中腹からは由利島を含め二神島の全景を目の当たりにすることが出来た。亀川旅館の人には良くしてもらった。やはり四国だなと感じさせるものがあった。

さて、土地の人たちはもとより私たち旅行者にとっても、のどかな



津和地島から南方向に見る二神島。2つの山は米山（左）と妙見山

環境と安定した状態がいつまでも続いてほしいものだが、見通しは明るくない。過疎と高齢化の進行、経済環境の変化により今日どの都市に行ってもシャッター街が目につく。東京でもターミナルから少し外れると例外ではない。我が二神島も前回訪れた時（2006年）には辛うじて小学校には生徒が何名かいたのだが、今回はすでに生徒はいなくなると聞く。蜜柑経済も成り立たなくなったそうである。研究会参加の方の話では、あと30年もすれば瀬戸内海の島は殆どが無人島になるだろうと云うことである。いや、その前にこの（航行の難しい）多島海を航海出来る（長年の経験を必要とする）船員が居なくなっているだろうという話である。何とも重苦しい問題ではある。

話は変わるが、この12月11日と12日の両日、神奈川大学日本常民文化研究所主催で民俗学の研究会&国際シンポジウムが開かれることを知った。同じ市内なので参加し、その際、二神島や研究会と関係の深い常民研を訪問したく思っている。上の課題を考えるのに何かヒントが得られないかと思う。そして、またの忽那諸島再訪の際のテーマを何か見いだせないかとも思っている。常民研訪問については、機会があれば内容を報告したい。

# 二神浩三さんの思い出

副会長 二神 俊一

## 1 お父さんにそっくり

生前、浩三さんと顔を合わす度に、「常一さん（浩三さんのお父さん）にそっくりですなあ」と、言うのと、「にこッ」として、無邪気に笑っているお姿が特に印象に残っています。常一さんも、口数は少ないけれど、そこにいるだけで存在感のある、円満で温かいお人柄が伝わってくるような好好爺の記憶があります。

誰でも、年齢を重ねていくと親にそっくりだといわれますが、浩三さんの、優しく、ニコニコしているのはお父さんと瓜二つの感じでした。会えば、必ずニコニコ顔で、「千代子さんはどうですか？」と、私の母の安否を気遣ってくれていました。

浩三さんと私の母千代子は、従兄弟同士であり、私は幼少の頃から「樽味」（浩三さんのお家の地名）へ、よく母に連れられて遊びに行っていました。いつも、父親の常一さんと母親の茂さん（おしげさんと呼んでいた）が、歓待してくれたことをよく思い出します。

樽味の家は2階建てで、裏庭に柿の木があり、秋になると、柿をもいできて食べさせてくれたし、畑寺の山にみかんを植えていたので、そこまで、歩いて行って、みかんをもいで食べさせてもらったりもしました。それは、昭和30年前後の頃の記憶であろうか。私が10歳前後の頃であったように思います。

浩三さんの父常一さんは明治21年生まれで、私の母千代子の父親、美徳（明治16年生まれ）の弟



（泰次郎さん、筆者、史郎さん、浩三さん）

（平成20年9月6日撮影）

さんである。常一さんは、兄美徳が若くして亡くなった（40歳）ので、一人娘の姪っ子の千代子をいつも気にかけてくれていたそうである。常一さんは愛媛師範学校を卒業し、味生小学校の校長先生や、愛媛県視学？、盲・聾唖学校の校長先生をされた、教育熱心で、温厚な、そこにいるだけで存在感のある素晴らしい教育者でした。

浩三さんは、常一さんと茂さんの三男として昭和2年9月15日松山で生まれました。お兄さんは、故常貞さん（長男）、泰次郎さん（次男）で、妹さんは、良子さん、弟さん、史郎さん、妹さん淑子さん、6人兄弟の真ん中です。

浩三さんは、昭和2年生まれですので、文字通り「昭和史」とともに歩まれた人生であったようにお見受けしております。

松山中学を卒業後、海軍兵学校76期終了。松山高等学校理科卒業、愛媛大学工学部機械科卒業後、愛媛大学工学部教授をされていました。専門分野は、機械工学の熱工学分野で、世界をリードしているような国際的なお仕事をされたと伺っていました。

最後は、工学部長として、管理面のお仕事が増えて、超多忙な日々を送られていました。



（前列右から3番目、浩三さん）（平成20年9月6日撮影）

## 2 二神系譜研究会活動

退官後は、畑作業に汗を流す傍ら、趣味の釣りなどをされておりましたが、ご縁があって、二神系譜研究会の活動に参画し、没頭いたしました。今から振り返ってみますと、二神のルーツ探しは、浩三さんにとって、文字通り、ライフワークになったようで、私からみてもとても充実した晩年をおくられたような印象をもっています。

二神系譜研究会の常任理事会には毎回ご出席されてくれて、頼もしい存在でしたが浩三さんに、「体調はどうか?」と尋ねると、「最近、足が痛うなって」「杖が離せんよ」と、一頃のお元氣なご様子ではないのが、少し、気がかりでありました。

「いずれ、手術をするから」と、この春に浩三さん・チヨリさんらと山口へドライブ旅行した頃（4月9日から4月11日まで）、お聞きしていました。またご自分の心臓の造影写真を見せてくれました（感心なことにいつも写真を持ち歩いていたのですね）。

その後、4月29日（昭和の日）「しまはく2010」のオープニングイベントが「アイテムえひめ」で開催され、我が二神系譜研究会もブースを借りて、会の活動をPRできました。その時も、浩三さんご夫妻がブース前で来場者とのお話を楽しそうにされていたのが印象的でした。

しまはく会場内 →



しまはくオープニング（平成22年4月29日、アイテムえひめ）



「しまはく2010」のオープニングイベントは一日で24000人の来場者があり、中島、二神島など瀬戸内海の島々の活性化のための仕掛けづくりは大成功であった。その後5月16日には第一回常任理事会が開催され、浩三会長も参加されている、協議も行い、その日は通常通りの集まりでした。

浩三さんから電話をもらったのは、5月20日の日でした。「病院の都合で、手術の日程が延び延びになっていたが、5月27日に入院して、6月2日に手術をする」とのことでした。

私は、6月下旬の株主総会を控えて、決算概況を愛媛県や松山市など、大口株主へ事前説明に訪問したり、何かとバタバタしていた頃で、5月31日にやっと時間が取れ、松山市民病院の4階の個室へ向かいました。部屋には、奥様のチヨリさまと、息子さん、敬次さんの奥様、陽子さんが、付き添っていました。浩三さんはすぐに私をみつけ、起き上がろうとして、ベッドを斜めに挙げてもらい、お話もできました。

6月2日には、チヨリさまから電話を頂戴しました「手術は、約9時間の大手術でしたが、成功した」旨の連絡で一先ず安心しました。落ち着いた頃にお見舞いに行こうと思っていたのですが、1週間経過した頃、陽子さんのお母さんの山本玲子さんへ様子を尋ねましたがまだICUに入っているとのことでした。陽子さんから私の携帯に次ぎのような連絡が入ったのは6月9日でした。

『2日（水）の手術は、8～9時間かかりましたが、無事予定通りでした。

出血量も問題なく、術後の血流も良好。脳梗塞を誘発することもなく、手足のマヒ等もないようです。体温もおちついています。

術後3日ほどは、はっきり覚醒してなかったのですが、脳の方の後遺症はその段階では不明でしたが、6日（日）には、意思の疎通がはかれることがわかり、安心しました。

7日（月）に口の中に入れていた管がはずされてからは会話もできています。

粘りのある痰がからむとかなり苦しいようで、これがうまく自力排出できるようになればよいのですが...

酸素マスクはまだ装着しています。他にもまだ何本もの管につながれているので、もうしばらくICUで過ごすと思います。』と、詳細に教えてくれたので、安心しておりました。

6月12日に陽子さんから次のようなメールをもらいました。

『心配おかけしましたが、今日午前中ICU→個室へ戻れました。

痰もおちついてきたみたいで、しゃべっても、苦しい表情ではなくなりました

部分入れ歯を外しているのと酸素マスクをつけているせいで言葉は少し不明瞭ですが、それでもちゃんと会話が成立するようになったので安心しました

「...ご心配おかけしました」って左手を上げて言っていました。

(1度落選した議員さんが再当選して、支持者を前に声を絞りだしたような感じでした)

ホッとしてとても嬉しそうな母に付き添いをまかせ、私は一旦帰宅しました。

しばらくは母と交代しながら付き添います。』

6月13日、日曜日、14時過ぎに市民病院の病室へ伺いました。奥様のチオリさんと陽子さんが付き添っていました。浩三さんは酸素マスクをつけたままで、ちょっと話しにくい点はありましたが、お話もできました。

私からは、先般、6月5日に下見に二神島や由利島へ行ったことなどをご報告しました。「お元気になったらまた二神島へご一緒しましょうね。」などと話しかけると、浩三さんも頷いていました。(私としては、浩三さんとお話できたのは、13日の面談が最後になろうとは夢にも思いませんでした)

その後、16日に感染症で発熱し、抗生物質の投与で落ち着きましたが、18日に急変。再開胸手術でICUに戻りはしましたが、午後9時5分ご逝去されました。

おりしも、二神系譜研究会の10周年の集大成の大事な時に、浩三さ

んとしては、会長職として、やり残したこともあるのではないかと思います。しかしながら、この10年間の浩三さんの研究会への取り組みは一生懸命であったように思います。本当にお世話になり有難うございました。

いろいろ思い出はつきませんが、浩三さまのご冥福をお祈りいたしますとともに、ご家族の皆様のご多幸を祈念いたします。

(平成22年12月記す)



豊田氏供養祭で黙祷する在りし日の浩三会長（右）と筆者（中）

# 故 浩三会長を偲ぶ

中部・関西支部理事 二神 宏介

## 「出会いと別れ」

はじめに

平成22年6月19日朝、俊一会長代理より浩三会長の訃報が届き、お通夜に間に合うよう、あわてて家を飛び出しました。後は走りながら考えようと思い、後の段取りは久藏理事にお願いしました。

大阪から松山までの6時間ちょっとの移動でしたが、浩三会長の中部関西支部に対し非常に丁寧につき合って頂いた事がいろいろ思い浮かんできました。

さて、出会いの頃から経時的に順を追って回想しました。

中部関西支部発足会、第1回 平成12年は発会式と懇親会をサニーストンホテル（大阪江坂）にて開催されました。

俊一副会長、栄三さんの熱心な会員勧誘で、中部・関西支部結成となりました。その席で浩三会長と初めて名刺を交換しましたが愛媛大学の教授の肩書きにびっくりしたのが最初の印象でした。

教授の肩書きで話すのでなく、いつもやさしいお人柄の中に一本芯の通った行動は後で知ったことですが海軍兵学校（76期？）の魂だったと思いました。

平成13年にサニーストンホテル（大阪江坂）にて第2回中部・関西支部総会を開催しました。

浩三会長にお願いし、特別講演（二神氏起源と二神会の調査報告）及び浩三会長を囲む懇親会を行ないました。

参加者は前夜祭13名当日16名延べ人数29名と盛大な会でした。



第3回、平成15年に奈良「国際奈良学セミナーハウス」にて支部総会開催しました。その会にも浩三会長は遠路松山からご参加頂き支部役員一同感激でした。参加者は26名でした。(写真 高島特別講師と談話中) 支部会終了後は奈良の古都を見渡せるレストランで会長との団欒も楽しいものでした。



特別講師 高島先生と



古都奈良を見下ろしながらの食事

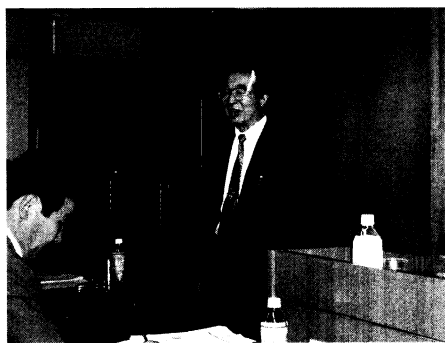


中部・関西支部の皆様にも囲まれて

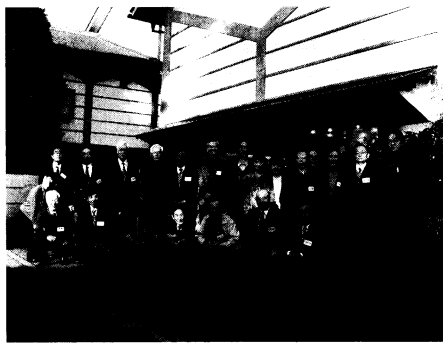
第4回平成17年11月に開催。

奈良ウエル飛火野荘にて於きまして、中部・関西支部総会を開催しました。浩三会長の開催挨拶の後、特別公演は広島の種類昭氏にお願いし「二神氏のルーツを訪ねて」と題して講演して頂きました。

ご参加の皆様は北海道、関東、中部、近畿、中国、四国と各地から中部・関西支部会のため、総勢22名と多数御参加いただきました一泊2日の会合でしたが、古都奈良での総会、散策等、会長を囲み楽しい会でした。



支部会総会で挨拶をされる浩三会長



支部の会員さんに囲まれて

第5回平成19年10月に大阪中央公会堂にて支部会開催。

その会にも浩三会長はわざわざ遠路駆けつけてくださいました。

支部会員の皆様で開催挨拶、浩三会長を囲む夕食会にも気持ちよく付き合っていたいただいたことは、思い出とともに感謝の気持ちで一杯です。

その当時から浩三会長は大分足腰が弱っておられるなど感じましたが、無理に大阪にお越し頂いたこと申し訳なく思っていました。

支部会員の末次三さんの葬儀にも遠路ご参列いただき又栄三さんの偲ぶ会を開催した際も足の悪い中ご参加頂き、よく冗談で死ぬまで会長をせいと言われると話されていましたが、冗談が本当になり二神系譜研究会の重しが外れたみたいで寂しい気持ちで一杯です。

一杯飲むと自慢の釣り師の顔になり、一度二神島で釣りをしましよ  
うの約束も果たせぬままになりました。

葬儀に参列した際、ご自慢の魚の剥製が飾られていましたのも、釣りの好きな浩三会長の自慢話が良くわかりました。

又、何時かの酒席のことと思いますが、海軍兵学校の記録を残したいと、今ゼロ戦の模型をつくっているが非常に精巧に出来ていると話されていたお顔は柔和な好好爺のお顔でした。

ここに改めまして浩三会長のご冥福をお祈りします。「合掌」

今後とも中部・関西支部会の活動に天国から御支援をお願いします。

中部・関西支部会

理事 二神宏介

## 「思い出のアルバム」



水軍大将 会員(家来)を従えて

二神水軍いざ出陣



九州 豊後森にて



栄三さんを偲ぶ会で  
支部会の皆様に囲まれて

## 豊田渉覚書から

常任理事 豊田 渉

今までにいろいろと二神系譜研究会の皆さん方をはじめ、島の人たちからお聞きしたことをメモしていたものの一部を書き連ねてみます。真偽のほどは不明のものもあります。けれども無碍にはできません。とにかく、今後の参考にしていただければと願うものです。



- ◆野球選手の松坂大輔は横浜市の出身ですが、生まれたのは青森市の二神産婦人科医院である。「松坂大輔 白球の軌跡」ラインブックス 瀬川ふみ子著から)
- ◆現在の東京都知事石原慎太郎さんの父君は愛媛県の出身で、山下近海汽船の社員だった。亡くなった時、社葬だった。葬儀の案内状は「石原慎太郎 二神範蔵」の連名。二神範蔵は山下近海汽船(株)の社長だった。「てっぺん野郎」佐野真一)
- ◆二神島の港にある梨岡素岳の石碑や松山市中島総合文化センター(今の私の勤務先)にある石のモニュメントの作者は田中担三さん。母君は、城辺二神氏の出とか。
- ◆正岡子規の弟子である河東碧梧桐の曾祖父末弥は、本島二神氏の出。松山の河東家に養子で入っている。(二神家系図)
- ◆元禄時代の赤穂事件。浪士の討ち入り後、大石主税、堀部安兵衛らが伊予松平久松家(現在、イタリア大使館のあるところ)に預けられた。その中の、貝賀弥左衛門の世話係の一人が二神十助だった。(松山藩の報告書から)
- ◆篆刻家で関東大震災後二神島に疎開した梨岡素岳の前妻は、松山・二神貞七の娘。後妻は二神島の竹内ツル。
- ◆江戸時代・嘉永6年(1853)の「松山城下絵図」に「二神傳蔵」の



記載あり。

- ◆松山市内にある二神花店は、二神島司郎家の分かれ「あたらしや（新屋）」か。
- ◆松山市本町スーパーフジの東側にある「豊田食堂」は、中島の饒の出身か。
- ◆松山藩の画家下村為山は二神家に養子に入っていた。妻は二神フジ。
- ◆新撰組局長近藤勇が流山で捕らえられ処刑まで預けられていたのが、庄屋日野豊田家だった。(2004年NHK大河ドラマ「新撰組」で)
- ◆明治22年以降に描かれたと思われる二神島絵図の中で、二神家墓地の2段目付近は山林になっている。1段目と3段目～5段目は墓地となっていて赤色に塗られている。2段目は、近年造成されたのか？二神司郎家の過去帳を見ると、2段目に葬られている人は誰もいないのです。

と、いかがですか？

ざっと書いてみると結構ありますね。これから、まだまだデータが増えていくと思います。皆さんも調べてみてください。ご意見もいただければ幸いです。案外、身近な所に隠れている、眠っているのでは。系譜研究は、こんな些細なことの中からつながってくるものがあるかも知れません。

どんなことでも構いません。事務局に何かありましたらご一報ください。皆さんの情報待っています。

(平成22年12月吉日)

## 「ふたがみ」にまつわる話

### 二神島の豊田勝さん、NHKラジオに出演

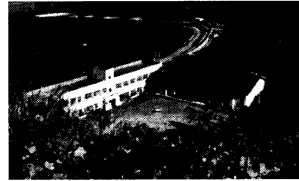
二神島に住んでいる豊田勝さん（49歳）。高齢者の多い中であって、島では若手！かつては、島でみかん栽培とタコ漁をしていましたが、現在は、みかん栽培をやめてソラマメ、七草、かぼちゃなどの野菜栽培とタコ漁と島の水道管理などの仕事を行っています。ほぼ年間を通して手を入れなければならないみかん栽培から、数カ月で現金収入を得られる野菜栽培へと切り替えたのです。そのあたりを中心に、島での暮らしの様子を交え、平成22年10月27日にNHKラジオ「ラジオビタミン」で放送されました。妻、3男（小5）、母と4人暮らし。長男は高校生で松山市内。長女・次男は中学生で隣の中島で寮生活を送っています。



小島



城ノ山びやくしん



二神小学校



松ヶ崎



山口県に沈む夕日



夕景の集落

「NHKホームページ」から

## 編集後記

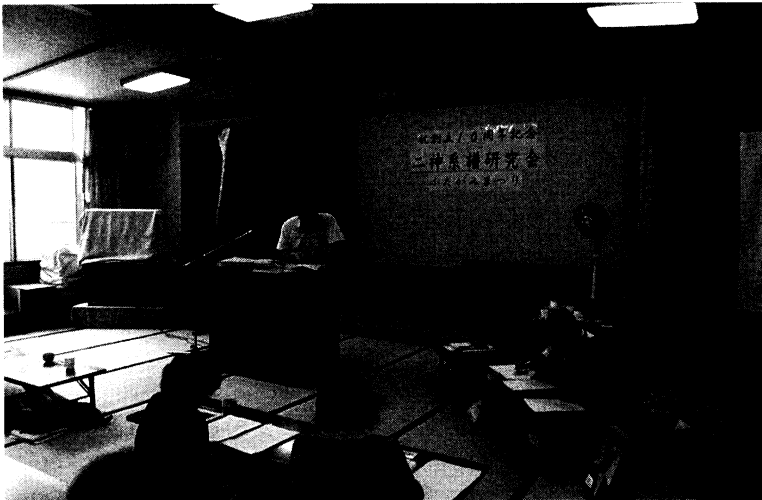
今回、冊子第13号は、若干難産でありましたが、やっとお手許にお届けすることができ、ほっとしております。早くからご寄稿頂いただいた方々、編集委員の方々、どうもありがとうございました。

「海の民、ふたがみ丸」は、浩三会長のご逝去もあり、若干、船足が緩んでいましたが、後半から巻き返し、なんとか印刷まで漕ぎ着けました。

あちらから、「期限は守らないといけんねえ」と、笑顔でいう浩三さんの言葉が聞こえてきそうです。

さて、二神系譜研究会としても、10周年を経過し、これからどういう風に進めていくべきか、どうあるべきか、いろいろと諸問題を抱えています。関係者で力を合わせて、エンドレスの旅に再スタートです。今後とも、今以上の皆様のご協力をお願いいたします。

平成22年12月  
副会長 二神俊一



(二神島のふたがみまつりー9月5日ーには、故浩三会長の遺影とご一緒に、奥様のチヨリ様、ご家族の皆様も参加していただきました)

## 編集後記

平成22年もいろんなことがありました。

一番の驚き、残念なことは浩三会長が逝去されたことです。今まで、この会報が出来上がるまで校正を含めて、いつもチェックをしていただいていた。それがもう叶わぬことになってしまいました。もう甘えてしまうことができません。「(会報を)早くに出しましょう。お願いしますよ」という声が今も聞こえてきそうです。これからも会員の皆さんたちの協力を得ながら、会報をつなげていきたいと思えます。

この1年、二神系譜研究会にとっては、4月の下関市豊田町一ノ瀬での「豊田氏慰霊五年祭」、「しまはく」のオープニングイベントへの出展への参加からスタートし、9月に創立10周年事業「ふたがみまつり」を開催し、一応の成果を見ることができました。ちょうど松山市が「しまはく（まつやま島博覧会2010）」を4月～10月まで開催し、その協力事業として「ふたがみまつり」を行うことができ、いくらかの助成金をいただいたのは正直ありがたかったです。それと、高知県梶原二神氏の調査では大きな成果を得ました。惜しむらくは、あと数年早ければ貴重な資料や関係者の方々からお話を聞くことができたのではという思いです。なかなか思うようにはいかないものです。

日本の国をみても政権が代わって1年以上が過ぎましたが、いっこうに変わらないように感じます。時間がかかるのは承知していても、もっと国民目線でやってほしいと願わずにはいられません。中央は人やお金などが集中して異様な状況となり、地方から人が減り、大変な事態に直面していると思えます。「地方に人を帰す」政策でもなければ、地方を活性化させなければ、将来の日本の行く末が案じられます。地方があつての中央で、中央があつて地方があるのではありませんからね。

(豊田 渉・平成22年12月吉日)